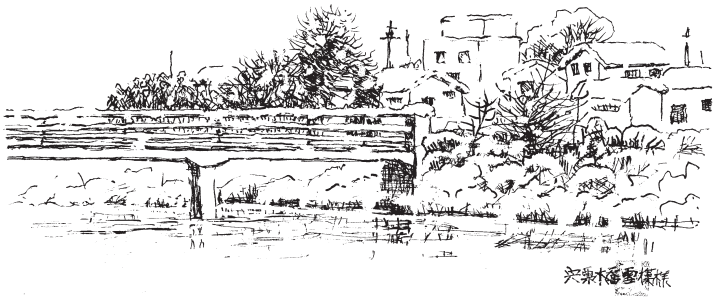
やまさき文化

’１４－３＊No.３３

宍粟市山崎文化協会



陶芸のともしびを繋ぎたい

宍粟市山崎文化協会会長　福岡久藏

かつて、山崎に「山崎焼」がありました。それを通称「源谷（げんこく）焼」といっていました。歴史郷土館に少しですが当時の作品が残されています。

ことの起こりは、関西電力が鹿沢にある山崎営業所を建てかえる時、地盤が粘土質だったため深く掘り起こし、大量の粘土を積み上げていたことがはじまりです。

プロの陶芸家、藤井山陽先生がそれを見て、「この粘土は陶芸用の土に使えます。この粘土を使って山崎焼を復活しましょう。そのためには窯を築かなければなりません。窯は私が築きます。できれば山崎焼窯場の近くに場所を提供して下さい」ということになりました。

「穴窯は火の回りが均一に通り難いので予期しない優れものや、これはと思うような絶品が出来ることがあり、夢があるので穴窯にします。」と意気込まれました。

山陽先生はまるで魚が水を得たように、チェンソーで大木を倒し、ブルドーザーやショベルカーを使って地をならし、大量の耐火煉瓦を運びこみ、それを一つ一つ積み上げ、一年半程かかってやっと形が見え始め、いよいよ最後の仕上げというところで、長雨に会い地盤がずれ、せっかくの窯が崩れてしまいました。また一からです。そして一年。やっと出来上がりました。やれやれという時に、今度は子供が窯の炊き口から中に入り、神経を使い一番手間ひまのかかる天井を下から突き上げ穴を空けたのです。

あの穏やかな山陽先生が大変ご立腹でした。そうこうするうち、先生は体調を崩され亡くなられました。私はあの窯が藤井山陽先生の作品のように思えて仕方ありません。

陶芸をされている方が揃ってあの窯を定期的に利用するとか、児童生徒の卒業記念の作品を焼くとか何か有効利用ができないものかと思っています。

（窯は山崎幼稚園の少し東を五十㍍ほど上がった所にあります。）

◇目　次◇

結びとどめよ　わが魂（たま）を　浅田　耕三　1
特別寄稿　稲澤　譲治　5
宮古島の青い空　安東はつ子　10
短　歌　渡辺　明美　12
俳　句　三宅　哲朗　14
身辺記「苔庭らしく」　井口　武一　15
観　桜　鎌田　裕明　15
新潮会の今後の方向について　岸脇　和行　16
囲碁「石心」　梶浦あさの　16
皆様と、ともに茶華道を　中村　秀幸　17
子供獅子舞の誕生　清水　省三　17
古代ロマンの地・宍禾　中野　剛志　18
コーラスに救われた私　安川英美子　18
さつき民踊グループの活動について　寺本三枝子　19
心はいつも青春で　森　清子　19
始めての日本舞踊　山口　摂徹　20
吟詠と共に　中本　義信　20
「あなたに響け、この想い」　大谷　司郎　21
郷土史再発見とガイド活動について　石野　和雄　21
継続は力なり　三谷　恭三　22
「平成会二十五周年を迎えて」　中川　摂昇　23
稀代の軍師「黒田官兵衛」　三谷　恭三　24
第十八回　山崎八幡神社薪能　清水　省三　24
川柳　破丸会　志水　和司　25
絵画との出会い　堂田由利子　26
第一回定期演奏会を終えて　中瀬　公三　27
山崎いさわ　冠句会　事務局　27
平成二十五年度 イベント報告　伊藤　次郎　28
事務局だより　編集委員　28
編集後記　藤原　義弘
表紙画／カット　荒木　俊介
表紙題字

結びとどめよ　わが魂を

浅田　耕三

わたしは、京は六条わたりにすまいしている女で齢は二十四、世間から六条御息所と称されておりました。実名はこの述懐にはさしてかかわりもあるまいゆえ申しませぬ。

「みやすどころ」は正しくは「みやすんどころ」ですけれど、この時代は「ん」は声には出しても、表記は通例いたしませんでしたので、後世の通称のままでお話をいたしましょう。

なお、これも少し余計なことかも知れませんが、みやすどころは元々帝や春宮（皇太子）の寝所をさすことばでしたが、転じてその方々の妃をさす語になりました。

さようでございます。私は名の通り、元春宮の妃でございましたが不幸にして夫が夭折し、私は幼い娘と二人、亡夫の遺してくれた六条の邸に住んでおりました。

けれど夫の没後しばらくすると、私の邸へつぎつぎと公達が結婚を申し込んで参りました。

皆さまご存知の通り、この摂関期の貴族は一夫多妻制で、三流四流の受領級の者達ですら四人や五人の妻をもっていたのですから、どうか私の妻に、と申し込んでくる公達がたくさん現れるのも当然のことでした。

私は自分で申すのも口幅ったいようですが美しさと気品は誰にも負けませんでしたし、その上超一流の教養と、元春宮妃という高貴な身分をもっていたのです。この時代は後世の人が想像しかねる程身分がものをいい、人の価値を決める社会でしたから、男性にとって私は最も魅力ある結婚相手だったでしょう。

さて、私の邸へやってくるその貴公子たちの中にかの光源氏もおられました。輝くばかりの美貌と若さ、それに今上の帝の御子という毛並のよさを備えた方が私に求愛なさったのです。私は胸がふるえました。けれど迷いもありました。

と申しますのは、私は二十四、源氏の君はまだ十七歳の若さ、その上、この君の女遊びは世上かくれもないことでしたからためらったのです。

けれど結局はなびいてしまいました。

何しろこの世に二人といない匂い立つ美しさと多芸、多才、そして天性の口説き上手のこの君の手練にどうして抗することなどできましょう。

けれどこの時から私の苦悩ははじまりました。

源氏の君には二十一歳の正妻葵の上のほか、噂にきいていたより多くの愛人がありました。そして稀代の色好みの彼は、一たんなびいてしまうと、もう私にはさほどの興味を示さず、私は毎夜、夜離れを味わわされたのです。妻問い婚の当時、新婚の夫が夜、妻のもとへ通ってこぬことを夜離れと申しました。

衣片敷くひとり寝の床の中で、私はさびしさ、くやしさと共に、元春宮妃ともあろう女が七つも齢下の男に見限られたのを、世間はどう見ているだろう、どう評判しているだろうかとそれも大きな悩みでした。

ところが源氏の君は私のそんな悩みなど、どこ吹く風の移り気と厚顔。申し訳にごくごく稀に私の邸へきて一夜を共にすごし、翌朝、夜明けに帰る時、見送りに出た、私に仕える中将の君という女房（女官）の、季節にふさわしい紫苑色の襲を着て薄絹の裳をくっきりと結んだしなやかな腰つきにたちまち目を奪われ、渡殿の高欄の隅に手をそえて中将を座らせ、求愛のうたを詠むのです。

さいわい、つつしみ深くて聡明なこの中将の君は、その歌を主人の私にあて

て源氏が詠んだものとして返歌するのですが、そんな彼女のゆかしさに比べて全くもってこの君の野放図さ、浮気心にはあきれはててしまいます。

そんな折も折『源氏物語』中、皆さまご存知の有名な「車争い」が起きます。賀茂神社の新しい斎院の御禊（みそぎ）の日、それに供奉する行列の見物に出かけた私の車は、偶然駐車の場所のとり合いとなった葵の上の車に片隅に押し込められて行列など全く見えぬどころか、車の轅をのせる榻までへし折られてしまったのです。

葵の上の車と比べるとずっと小さく供人も少なかった私の車は、私の誇りと共にさんざんに壊され、しかもその相手が恋しい男の、子を懐妊していると知って私は目のくらむようないきどおりにおそわれ、瞋恚の青い炎を燃え上がらせたのです。

そのうち葵の上に出産が迫り、なにやら大変な難産だという噂を私は聞きました。この平安期頃は病気も怪我も重いお産も何よりの治療法は加持祈祷ですから、葵の実家左大臣家では高徳の僧や修行を積んだ修験者を多数集め、朝夕懸命の祈祷をさせていたそうでございます。

源氏の君もお見舞いに駆けつけられました。

さて、このあとは皆さま、少し奇異に思われるでしょうけれど、事実ですから申しましょう。私の生霊が源氏の君の内側に入ったり祈祷僧の近くに寄って見聞したのでございます。

産所に臥せって苦しみ、ひどく泣く葵に対し、彼女が泣くのは彼女の両親の左大臣夫妻や夫の自分とこのまま死別するのをつらがっているのだと源氏の君は考え、心配しなくてもここであなたが死去するような事は万々ありませんからと慰めると、産婦は意外な事を口走るのです。

紫式部は物語の中でその情景をこう描いています。

生霊　「いで、あらずや。「身の上の、いと苦しきを。しばし休め給へ」と聞えむとてなん。かく参り來むとも、更に思はぬを。物思ふ人の魂は、げに、あくがるゝ物になむありける」

と、なつかしげにいひて、

生霊　嘆きわび空にみだるるわが魂を結びとゞめよしたがひのつま

と、のたまふ聲・けはひ、その人にもあらず、變り給へり。「いと怪し」と、おぼしめぐらすに、たゞ、かの御息所なりけり。あさましう、人の、とかくいふを、「よからぬものどもの、言ひ出づる事」と、聞きにくく思して、のたまひ消つを「目に見す〳〵、世には、かゝることこそは、ありけれ」と、うとましうなりぬ。「あな心憂」と、おぼされて、

源「かくのたまへど、誰とこそ知らね。たしかに、のたまへ」

と、のたまへば、たゞ、それなる御有様に「あさまし」とは世の常なり。

（傍注略）（岩波文庫『源氏物語』㈠）

原文のところどころを簡単に後世の口語体にしてみましょう。

「葵にのり移った生霊の言葉『いいえ、違います。私が苦しいので祈祷を少しゆるめてほしいのです。こんな所へ私はくるとは思いもしなかったのです。悩みが多いと、ほんとに魂が体をぬけ出していくのですね。どうかこの着物の下前の褄を結んで私の魂がぬけていくのを止めて下さい。』と歌をよむので、これはおかしいと源氏の君がよくよく耳をすますとその声はまさしく御息所。なんと不可解なことよと『そうおっしゃるあなたは誰ですか、はっきり言って下さい。』というとそこに臥せっているのは顔も姿もまぎれもなく六条御息所、すなわち私でした。」

葵の上にとり憑いている物の怪が私の生霊であるという厳粛な事実に直面して源氏の君は激しい衝撃を受けたのでしょう。

前掲に引用した原文のつづきをさらに引用してみましょう。

すこし、御聲も、しづまり給へば、「ひまおはするにや」とて、宮の、御湯もて寄せ給へるに、かきおこされ給ひて、ほどなく、むまれ給ひぬ。「うれし」と、おぼす事、限りなきに、人に驅り移し給へる御物の怪どもの、ねたがり惑ふけはひ、いと物騒がしくて、後の事、又、いと心もとなし。いふかぎりなき願ども、たてさせ給ふけにや、たひらかに、事成りはてぬれば、山の座主、なにくれやむごとなき僧ども、したり顔に、汗おし拭ひつゝ、いそぎまかでぬ。

（中略）

院をはじめてたてまつりて、親王達・上達部、残るなき産養どもの、珍らかにいかめしきを、夜ごとに見のゝしる。男にてさへおはすれば、そのほどの作法、賑はしく、めでたし。かの御息所は、かゝる御有様を聞き給ひても、たゞならず、「かねては、いと危く聞えしを、平らかにも、はた」と、うち思しけり。あやしう、我にもあらぬ御心地を、思し續くるに、御衣なども、たゞ芥子の香に、しみかへりたり。あやしさに、御ゆする参り、御衣着かへなどし給ひて、こころみ給へど、なほ、おなじやうにのみあれば、（下略）

（前掲引用に同じ）

要点だけを拾って少々恣意的に私の解説を述べてみましょう。

うしろから抱きかかえられてお産するのがその頃の風習でした。葵の上が無事出産すると憑坐の少女に乗り移っていた物の怪どもがねたがって騒ぐのです。生まれたのは男の子、のちの夕霧ですね。この祈祷僧の中には山の座主、すなわち叡山延暦寺の座主までいます。

今を時めく左大臣家姫君の出産とあって帝をはじめ親王や上達部達が祝いの品をたずさえて参り、祝いを受けた家はその客を請じて宴を張ります。産養といい、出産後三日、五日、七日、九日目と祝宴を重ねます。

葵の上の無事出産、それも男子の出産とあって、連夜の祝宴となりその噂を、現身の私は六条の邸できき、正直腹立たしくねたましく、暗い気持ちでうつむいておりますとふと、自分の髪や召物に芥子の香がしみついているのに気づいたのです。胸を突かれました。大いそぎで召物を洗い髪を洗いましたが匂いはなかなかとれません。私はこの時はじめて私の生霊が葵の上にとりついている事実をはっきりと知ったのです。

芥子の実は祈祷の際、僧が護摩の火に投じるのです。私は必死に女房たちに手伝わせて「ゆする参り」を致しました。髪を洗うことを汨参りと申します。洗う湯は強飯を蒸した湯です。ほかにお米の研ぎ汁や灰のあくを用いることもありますが、洗ったあとの快さは蒸し湯にまさるものはありません。湯をみたす器は汨坏といい漆器です。手伝った三人の女房は私のただならぬ形相からうすうす事情は察していた筈ですが黙って手際よく作業してくれました。忠実な彼女たちは、主人の心痛、かなしみは自分たちのかなしみなのです。

さて、葵の上は産後程なく身罷られました。

私は京にいても苦悩がまさるばかりと思い、娘がさいわい伊勢神宮の斎宮に任ぜられましたので、娘に扈従して伊勢へ下りました。

四年後に娘の任が解けたので京に戻りましたが、しばらくして重い病にかかりました。

そんな点では甚だ律儀な源氏の君が見舞いにきて下さったので私は病床から政界一の実力者で内大臣のこの君に、娘の将来を托しましたがその際きっぱりと申しました。「くれぐれも娘はあなたの愛人にだけはしないで」と。葵の上のお産以来、私へのおそれが身にしみこんでいる源氏の君は、愛人にはしませんでしたが娘を自分の養女として入内させ帝の女御（妃）としました。のちの秋好中宮です。娘を女御に上げることは政権を確立する最高の手段ですから、この君のしたたかさはほんとにみごとというほかありません。

私は死去しましてから十三年後、今度は死霊となって源氏最愛の妻、紫の上にとり憑き彼女を苦しめます。実に罪業の深い私ですけれども、これは決して

私の現身の意志ではなく、体をぬけ出た別人格の作業ゆえ何とも致し方ないのです。

この時とり憑いたのは、源氏の君が寝物語に紫の上に、これ迄自分が遍歴した女性の話をし、私のことを、誇りばかり高く嫉妬深くてあつかいにくい女だと不用意に話したせいなのです。何という身勝手な言いぐさでしょう。ほかの愛人に自分の悪口をいわれる、私はそれだけはどうにも我慢ならぬのです。

紫の上には私は何のうらみもありません。

それならどうしてこの自分にとり憑かぬのかと、その時憑坐にかり移されていた私の死霊に源氏の君は糺されました。私とてそうしたいのですが、源氏の君は勢が強くて取り憑く事ができぬよしを申しました。

以上、ほんとに長々とおしゃべりいたしましたが、私の死霊はなんと死後千余年を経て今も幽明界をさまよっております。

八十を過ぎた老残の元教師が、ひとり何の酔狂か、二十年余り市の図書館で半可通の「源氏物語」の講釈をし、私はそれを時々のぞいております。物語には源氏の君をめぐり、たくさんの女君が登場し、みんなそれぞれに美しく個性的で魅力に溢れておりますけれど、この村夫子は私に一番心を惹かれているらしく、他の女君たちは、源氏の歩む道筋にブルーやピンクの灯をともして綺羅星の如く並んでいるけれど、私だけは真赤な閃光を強烈に輝かせていて、この真紅のいろどりがなければ、さしも長大なラブロマンスも、もっと平板な、おだやかで少々退屈な物語になっていたろうと内心思っているようなので、私はそんな彼の講義を時々覗いてみたくなるのです。

物の怪とは、人間の忸怩たる思いや畏れの感情が生みだす幻影だというある識者の言をよんだことがあるが、物語という虚構の世界だけでなく実際、平安貴族たちは現実の生活の中でこの物の怪に遭遇し、恐怖し、躍起になって霊をしずめる加持祈祷に奔走していたらしい。

藤原実賢の『小右記』にも藤原道長の『御堂関白記』、『紫式部日記』など諸古記録にしばしば物の怪は現れ、道長などは、兄道兼の物の怪がとり憑いた道兼の妻藤典侍に突然おそわれたりしている。

生来、病弱で、小心と大胆がいりまじっていたといわれる道長はしばしば病にかかり、そのたび物の怪におびえ右往左往しているさまが前記の記録類によく出ている。

参考　○『日本古典文学全集源氏物語』（小学館）

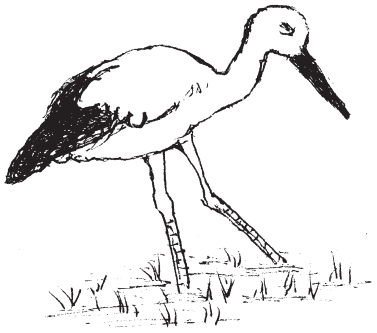
○『源氏物語』㈠（岩波文庫）

○　〃　㈡（　〃　）

○　〃　㈢（　〃　）

○『藤原道長の日常生活』倉本一宏（講談社現代新書）

○『「御堂関白記」と「権記」の現代語訳』（講談社学術文庫）



特別寄稿

宮古島の青い空

東京医科歯科大学 難治疾患研究所 教授
稲澤譲治
（宍粟市山崎町出身）

昭和五十七年五月のゴールデンウイークが明け、それまでの六年間、学生として通った京都府立医科大学の門を新米の内科研修医としてくぐった。社会人としてのスタートに一抹の不安はあったものの、これから展開される臨床医として修練できることへの期待は大きく意気軒昂の足取りであったように記憶している。当時の京都府立医科大学の建物は古く、開学以来一一〇有余年と我が国の中でも屈指の歴史を持つ大学でありながら、停滞した地方行政のもと、ハード・ソフトの両面で改革は立ち遅れていた。鴨川沿いの病棟は戦前に建築されたもので竣工時には東洋一と謳われ、その面影は特等室の造りに色濃く残っていた。鴨川に面したその部屋のベランダはデッキチェアを設えて日光浴ができるほどに贅沢なスペースが取られており、病室とは四枚のガラス戸で仕切られていた。部屋の壁には円形の小窓が切られ、小さいながらも上品なデザインのステンドグラスが填め込まれ柔らかい陽光を室内に投影していた。鴨川の堤から眺める建物の外観はというと、欧州風の造りで外壁は淡い褐色に塗られており、そこに幾何学的な文様が削られていた。戦前、川口松太郎の小説「愛染かつら」は、田中絹代と上原謙の二人を主演に映画化され一世を風靡したが、この鴨川べりの瀟洒な建物はその撮影の舞台に使われたと聞いている。

私の頃は、医学生は卒業の半年前にどの診療科に進むかを決めて希望する各科の教授に入局の意向を伝え、受け入れの了解を取っておくのが要件であった。そして医師国家試験合格者の氏名が新聞で公表された翌日から研修医としての生活は始まった。私は、学生時代から血液学、特に白血病の診断や治療を学び手術では決して治すことができない血液のがん、白血病の患者さんを救うことを夢見て内科を選んだ。実際、入局した診療科は消化器病学と血液病学を標榜しており、またそれらの研究も行われていた。教授には入局前から血液学を学びたいとの意志を伝えていたこともあり、昭和五十七年五月六日の当初から、私は、既に入院中であった成人T細胞性白血病（Adult T-cell leukemia; ATL）という比較的特殊なタイプの白血病患者の担当医となった。勿論、その患者さんにはベテランの専門医がついており、私はその先輩医師の指導のもとで研修する新米医師の一人に過ぎなかった。

ところで、皆さんは、ＡＴＬという比較的日本人に固有に発症するタイプの白血病をご存知でしょうか。HTLV1(Human T-cell leukemia virus 1)というＲＮＡウイルスの感染が原因で起こる白血病で、細胞性免疫の担い手であるＴリンパ球ががん化する難治白血病の一つとして知られています。この病気が一九七七年に日本人の医師により初めて報告されて以来四十年近くが経ちます。不治の病とされてきましたが、二〇一二年、我が国から特効薬となる抗体薬のポテリジオも開発され保険適用となりました。この成果は新聞等の報道でも取り上げられ一時耳目を集めました。

私が担当したＡＴＬの患者さんは、当時、三十六才になったばかりの女性（Ｙさん）でした。夫との間に小学生になる兄と妹の二人のお子さんがいました。私はその日から毎日、決まって朝八時前にＹさんの病室を訪ね、診察をしながら言葉を交わし病状の確認と検査のための採血をしました。当時は未だ骨髄移植法すら十分には確立されておらずＡＴＬの治療法は全くの手探り状態でした。Ｔリンパ球自体が侵されることから、ＡＴＬの多くは免疫不全による日和見感染症で亡くなります。私が担当する一ヶ月と少し前に入院されていたＹさんは抗がん剤による標準的な化学療法も効を奏さず、改善の兆候すら見出せない状況でした。そして、やはり免疫能の低下による全身の帯状疱疹に苦しみ、これに対する治療として当時では最新の抗ウイルス薬インターフェロンの治療を受けていました。しかし、薬石効なく、原疾患のＡＴＬに加え様々な合併症と熱発、帯状疱疹による痛みに苦しまれていました。

現在では、白血病治療が行える規模の病院にはクリーンルームが設置されています。しかし、その当時、クリーンルームのある病院は近畿地方でも大阪成人病センターのみでした。私が研修する病院にクリーンルームはなく、その代わりに個室が充てられ可能な限りの除菌と無菌操作の励行により、病室外から

の感染源の持ち込みを防いでいました。このため、Yさんが夫や子と面会する回数と時間には制限が設けられていました。家族と話をするどころか顔も会わすことができない不自由な状況であり、Yさんは勿論のこと夫と二人の子どもにとっても、心身ともに不安定で疲弊する状態が続いていました。

そのような中、年度の変わりという時期の巡り合わせにより本人の意志とは無関係に、慣れ親しみ信頼を置いた医師から何処の誰かもわからぬ大学を出たばかりの新米の私に担当医が変わってしまったわけです。病気そのものに加え不自由となった環境の二重苦から、Yさんの心は私には容易に開かれず、なかなか思うように会話も繋がらず、医師として人間として非力を感じる日々が続きました。

Yさんは宮古島の出身でしたが、その母が宮古島から上洛し、病室で寝泊まりをして娘であるYさんの看病をしていました。診察を終えて病室を出ようとする私の背中にその母親は「先生、何とかならんですか」と毎回言葉を掛けてきます。その都度私は「できる限りのことはします。頑張りましょうね」と返すしかできず、扉を閉めて病室を後に廊下を渡るそのときの無力感は例えようも無く、「一体何故このような過酷な病気があるのか」と神の非情を恨む日々が続きました。

ただ、私は手先が器用であったせいか新米ながら注射・採血などの細々した手技が他の医師よりも多少上手かったようです。これは周りの看護師さんたちからも認めてもらっていたので決して独りよがりでなかったはずです。注射・採血は、これをする側とされる側の関係は、教師と生徒の間の授業のようなものかもしれません。学校では、授業下手の教師にあたっても生徒の方は担任を変えるわけにいかず、また、病院では担当医が注射下手の場合、患者は諦めと覚悟をもって受け入れざるを得ません。とりわけ血液疾患の患者さんは、採血検査に加え点滴があるために一日に何度も注射の洗礼を受けることになり、下手な医師にかかると病気とはまた別の苦痛に苛まれることになります。私の指導医でもあるYさんの主治医は、ベテランながら注射の腕前は平均的でした。このため、程なくYさんは平均より少し上であった私を指名するようになり、これが幸いしました。診察、注射、採血と一日に何度も訪床するようになり、接遇の時間とともにYさんとの会話も次第に増え、閉ざされていた心も徐々に開かれるようになりました。

Yさんは宮古島の学校を卒業し、そのまま集団就職のような形で倉敷の紡績工場に就職しました。そして同じ会社に、やはり滋賀県から就職していたご主人と知り合い、本人の言葉を借りると大恋愛の末に結婚したとのことです。ご主人が誠実で優しいこと、元気でよく言うことを聞く二人の子供のこと。そして、自分を育んでくれた宮古島の美しい海と青い空のこと。島で暮らす父と母に可愛がられて育ったことなど、病状が少し落ち着いている時に少しずつ語ってくれました。付添いの母親も「先生も一度、宮古島に訪ねて来れば」と声をかけてくれました。沖縄本島ですら訪れたことの無い私には、そのさらに南三〇〇キロも離れて位置する宮古島は、想像すらできぬ世界でした。「是非、Yさんが元気になられたら行きます。その時は案内して下さいね」と、私はYさんとその母との会話の中で、二人から受ける「信頼」とともに開衿の情を共有できました。そして医師であることは「病気を知るだけでなく、人を知ること」とも自覚したのです。

Yさんの骨髄抑制はなかなか回復が認められず、小康もつかの間、その病状は六月に入り急激に悪化していきました。六月七日の夜から意識レベルの低迷が始まり、私の問い掛けにも応答はなくなりました。Yさんの母からは、「午後に父親が京都に到着する」ことを告げられていましたが、その時点でYさんの気道からは分泌物が増え十分な酸素を取り込めず、指導医の決断で気道確保のために気管切開が施されました。気管切開は自発の声を失います。切開部に装着されたカニューレには空気を送り込むアンビューバッグが繋がれました。バッグを揉む役目は私です。かすかに残る自発呼吸に合わせながら「お父さんが到着するまで頑張ってくれ」と祈る気持ちでバッグを揉み酸素を送りました。堅くなった肺からは気道を通して大量の分泌液が返ってきます。このため定期的にバッグを外しては、カニューレから吸引チューブを挿入して気管に貯留した分泌物を吸引する必要があります。この役目は同期の研修医が駆けつけ助けてくれました。二人は交代しながらYさんの人工呼吸を続けました。数時間が経ち夕方近くにYさんの父親が病室に到着しました。宮古島の自宅の庭に咲い

ていた花を持参しており、それを娘の前にかざしながら「幸子（さちこ）、見えるかあ、幸子。見えるか」と何度も、何度もYさんの名前を呼びました。残念ながらYさんからは微かな応答もありませんでした。私はアンビューバッグを揉み続けながら滝のように流れる涙を止めることができずにいました。同僚の手前というだけでなく、患者の臨終に際しての涙は医師として慎むべき行為と平然を装おうとするのですが、堰を切ったごとくの落涙は防ぎようもありませんでした。Yさんが横たわるベッドを挟み私と対峙し、一生懸命に気道分泌物の吸引を続けてくれているその同僚の目からも大粒の涙がボロボロとこぼれていました。暫くしてYさんは鬼籍に入られました。

私はその後も合わせ五年間を血液内科医として過ごしました。多くの白血病患者さんの診療をさせていただきました。卒業後三年目には、国立福知山病院に内科医師として赴任し一年余りを務めました。そこでは血液外来を開かせていただき、ほどなく京都府北部だけでなく、兵庫県の柏原町や豊岡市からも患者さんが診察に訪れてくれるようになりました。現在、国立福知山病院は福知山市民病院と名前を変えていますが、そこに血液外来は続いており、私の後輩の一人が内科部長を務め診療にあたっています。当時の患者さんの中には、白血病を克服して現在も元気で生活をされている方もいらっしゃいます。一方で、少なくない患者さんが治療の甲斐なく亡くなられました。このような臨床を通して、患者さんの一人一人とまたその家族と人生を共有することで様々なことを学び、教えを受ける貴重な機会を得ることができました。白血病は治療を受ける患者さんにとって過酷ですが、治療を行う医師にとってもやはり過酷な病気です。病気と闘うだけでなく、同時にその治療とも闘うことが強いられます。

私は、この白血病の原因や病態を少しでも明らかにできれば、そのことが治療法の開発にも繋がるはずとの思いで、卒業後四年目から臨床の合間を縫って細胞遺伝学の研究を開始しました。尊敬をできる指導者に出会えたことも大きく、一年後には寝食を忘れるほどにのめり込んで行きました。しかし、三年間が過ぎて成果の一つを上げることもできない状況でした。同僚が次々と結果を出して研究論文を発表する中、残り一年で成果が出なければ「研究は自分には不向き」と諦めようとも思っていました。当時の私の研究テーマは遺伝子マッピングであり、それは新しくクローニングされた遺伝子がヒトのゲノムの何処に存在しているのか、その遺伝子座を突きとめることでした。「遺伝子」を「人」に例えると、私のテーマは、ある特定の人（遺伝子）がこの地球上（ゲノム）のどの国のどこに住んでいるのか、その詳細な住所を明らかにするものです。言い換えると、私は、何の手がかりも持たず、地球上の七十一億人の中からたった一人の犯人を割り出すことを命じられた刑事の立場です。あるいは、遺伝子の住民台帳を作るような研究と言っても良いかもしれません。特に染色体の形態観察と同時に遺伝子座を決定する染色体マッピング法は、当時、我が国では唯一、北海道大学理学部附属染色体研究施設でのみ行われている特殊な技術でした。これを一から開発し、さらにその技術を用いて誰も知らない新しい遺伝子のゲノム上での座位を決めるというテーマへの挑戦は、果敢と言うよりはむしろ無謀と言った方が正しかったでしょう。

その頃は結婚をしたばかりでもあり、妻は何度か大学の研究室まで夜十一時頃に夜食を届け応援してくれました。毎日が失敗、そんなある日、儀式のように「どうか良い結果が出ていてくれ」と祈りつつ顕微鏡を覗き込みました。いつも通りに標本を載せた顕微鏡のステージを左右に大きく移動させながら、まず弱角レンズで標本全体を観察して、その出来具合を確認します。次に高倍率レンズに切り替え、分裂した細胞から飛び散った染色体を一本一本丁寧に観察します。「おっ」という気持ちとともに、小さな第十九番染色体の上に銀粒子が見えました。固唾を呑み込み喉が鳴ります。鏡筒から目を離し背筋を伸ばして数回の瞬きをして再び顕微鏡を覗き込みます。頭の芯が痛いほどに集中します。やっぱり銀粒子が光っています。「もしかして」との期待とともに、少し頭が熱くなります。一方、この数年間、期待を裏切られてきたことを思い出し、「待て、待て。慌てるな、慌てるな。確認、確認。再現、再現」と心の中で呪文のように呟き、もう一度、対物レンズを広角に切り替え、広い視野の中に浮かぶ細胞の分裂像を探し出します。ゆっくりと高倍率レンズに切り替え、大きく映し出された染色体を一本一本丁寧に観察します。さっきと同じように、やっぱり十九番染色体に銀粒子が光っていました。「間違いない」と心で呟きもう一度、固唾を呑みました。胎児性癌抗原（ＣＥＡ）の遺伝子座が決定された瞬間です。三年余りの苦闘の日々が走馬灯のように頭をよぎりました。直ちに教

授室に行き「先生、やりました。成功したようです。」と報告すると「ほんま、ほんまか」と喜色満面で応えて下さいました。直ちに顕微鏡を覗いてもらいました。そして、「稲澤君、やったなあ。頑張ったなあ」との言葉を掛けていただいた時、目頭が熱くなりました。

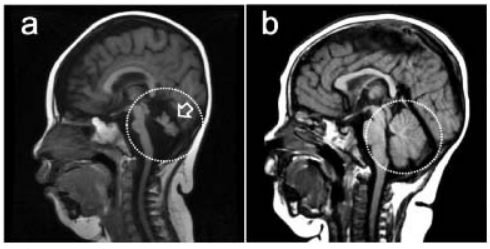
それから月日は流れ二〇〇九年夏、初めて私は妻と宮古島を訪ねた。Yさんの言葉のように、抜けるような青い空、乾いた風、透き通る紺碧の海と白い砂浜、そして、都会では見られない眩いばかりの子供たちの澄んだ黒い瞳。Yさんとそのお母さんと約束をした日から、実に四半世紀以上が過ぎていた。ずっとずっと約束を果たしたいと思っていたけれど、忙しさが先に立ち果たせていなかった。Yさんのふる里の詳しい住所までは聞いていない。長寿県として知られる沖縄といえども、Yさんのご両親はもうご存命ではないかも知れない。レンタカーを駆って島の隅々までを巡った。そして、最北端の西平安名岬に立ち夕陽に映える海を前に、「どうぞ安らかに、そして二人のお子さまが幸せであるよう」と願い手を合わせた。

私は白血病の原因遺伝子の解明を目的に研究を始めたが、その過程で、迅速かつ高精度の遺伝子マッピング技術を確立することができた。丁度、一九九〇年より開始された国際ヒトゲノム解析プロジェクトが始まったばかりであった(写真1)。幸いにも私の技術は当時の科学技術庁（現・文部科学省）が推進するゲノムプロジェクトにおいて先端技術として導入され、世界に先駆けて高精度ヒト第十七番染色体地図を完成させることができた（写真2)。これは後に乳がん原因遺伝子BRCA1やその他の様々な遺伝性疾患の原因遺伝子の同定に貢献した。一九九六年に東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センター中村祐輔教授（現・シカゴ大教授）から誘いを受け研究の場を東大に移した。その二年後には今度は東京医科歯科大学から要請を受け現在に至っている。この間、小児急性リンパ性白血病のMEF2D-DAZAP1転座など多くの癌や遺伝性疾患において原因となる新しい遺伝子異常を明らかにすることができた。私たちが経済産業省の支援を受けて開発した先天異常症候群診断用ＤＮＡアレイ(通称、ＧＤ-700)は、産学連携研究の成果として富士フィルムより供給され、医療の現場でも利用されている。さらに二〇〇八年には、女児に発症する稀な小脳脳幹部低形成症の原因がＣＡＳＫという神経発生に重要な役割を果たす遺伝子の欠損によることを発見し世界に先駆けてこれを報告した（写真3)。この発見を切っ掛けに、本邦において現在まで三十例が見出され、ＣＡＳＫ異常症という新しい疾患概念が確立された。二〇一二年には共同研究者の大阪母子保健総合医療センターの医師が中心となり患者家族会も結成され、この稀少難病への支援の輪も広がりつつある。臨床を離れた身ではあるが医師としての冥利に尽きる。

遺伝医学は腫瘍学とともに私の主たる研究領域である。日本人類遺伝学会は会員数四〇〇〇人を超える比較的大きな学術団体であり、私は二〇一五年に第六十回日本人類遺伝学会大会（期・十月十四―十七日、於・京王プラザホテル）の会長を務めるが、そこでは、ゲノム情報を活用した医療の展開と社会実装をテーマに患者さんのもとに届く成果を国内外の研究者に紹介して頂こうと考え

（写真１）
1991年ロンドンで開催された国際ヒトゲノム会議でDNA二重らせん構造の発見者ジェームズ・ワトソン博士(左)と

（写真２）
2008年日本国際賞授賞者ビクター・マキューズィック博士夫妻と授賞式前日の歓迎懇談会の席で。私の右は松原謙一阪大名誉教授



（写真３）
CASK遺伝子異常による小脳脳幹部低形成症の患児のMRI画像（a)。健常児(b)と比較して円内の小脳が萎縮（a矢印）しており脳全体も小さい

ている。日本は世界のどの国も経験したことのない未曾有の高齢化社会を迎えており、我が国の医療は質的にも経済的にも大きな課題を抱えている。引き続き難病克服のための研究を推進しながら、次の世代に負荷を残さぬよう、そして希望が抱ける環境を整えながら、若い人材の育成にも注力したい。

稲澤譲治氏のプロフィール

宍粟市山崎町出身。昭和31年生まれ。兵庫県立山崎高校、京都府立医科大学卒、医師・医学博士、平成５年京都府立医科大学講師、平成８年東京大学助教授、平成10年東京医科歯科大学教授、同・硬組織疾患ゲノムセンター長、同・学長特別補佐、同・疾患バイオリソースセンター長。日本癌学会理事、日本人類遺伝学会理事、日本がん臨床試験推進機構理事、日本血液学会代議員、日本医学会評議員、Cancer Science 他の国際誌編集委員、平成26年４月より国立大学法人東京医科歯科大学副理事。

〈賞等〉日本血液学会奨励賞、京都府立医大青蓮賞、高松宮妃癌研究助成金受領、日本医師会医学研究助成費受領、日本癌学会 JCA-Mauvernay 賞、ブルガリア国立科学アカデミー外国人会員、文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）他。

研究室HP URL. http://www.tmd.ac.jp/mri/cgen/framepage.htm
疾患バイオリソースセンターURL. http://www.tmd.ac.jp/brc/
癌関連講演動画：http://www.senri-life.or.jp/movie/semi_131108.html

第三十五回春の芸能祭ご案内

日　時　平成二十六年五月十八日（日）
午前十時から
場　所　山崎文化会館（サンホールやまさき）
主　催　山崎文化協会・㈶山崎文化振興財団
後　援　神戸新聞社・宍粟市教育委員会・宍粟市

会員の日頃の練習の成果を、ぜひご覧くださいますよう、ご案内申しあげます。

参加部門　山崎詩舞道連盟　山崎邦楽の会
山崎日本舞踊の会　さつき民踊グループ
山崎民謡連合会
その他宍粟市内より賛助出演

短歌

山崎歌人協会所属の短歌会

新樹短歌会　安東はつ子

山崎歌人協会には、山崎歌話会、柏野短歌会、新樹短歌会、一葉短歌会、水甕山崎グループ、つくつくぼうしの会、以上六つのグループが所属している。

今日は、新樹短歌会について記してみたいと思う。

昭和四十六年、当時宍粟地域で活動していた短歌会の有志のメンバーが集まり、「新樹短歌会」が今は亡き藤村省三先生により結成された。今年で四十三年を迎える。

その間に合同歌集三集が出ている。歌集名の『新樹』は新樹のように、瑞々しく旺盛に作歌意欲を持ち続けるようにと、先生の願いが込められたものである。

昭和五十九年の第一歌集十四名、昭和六十三年の第二歌集二十二名、平成四年の第三歌集二十八名の、会員が出詠している。当時は会員も多く四十名近い会員を指導して下さっていた。先生は常に「把握と表現の如何によって定まる。常識的人情的になることをつとめて避け作歌態度としては、写生に徹し単純化に心掛けて声調を重んじよ」と強調された。

第三歌集の序に

作歌力は、努力の集中と継続によって培われる。

心掛けることは、その対象に心を集中して凝視することである。外形だけを漠然と見ていては良い歌はうまれない。

継続とは、だらだらと続けるのではなく、心を張りつめて意欲的に、密度の濃い作歌生活を続けることである。

また多方面に趣味をもっていて、そのどれをも捨て切れない人がある。それでは精力が分散されて、そのいずれにも秀でることが困難となる。一つを得ようと願えば、他を捨てねばならない。

六十歳には六十歳の、七十歳になれば七十歳の新しい境地がある筈である。年をとってたとえ感受性が衰えたとしても、若い頃には体験することの出来なかったその新しい境地に挑む姿勢を忘れないでほしい。安易に老に順応するのではなく、意欲をもって明るく老を切り開いてゆこう。と記されている。

その後平成五年に師は死去された。現在会員は十五名、先生亡き後、栗山節子氏を中心にその教えを守り今日に至っている。

この度、第一歌集を繙き今は亡き先輩諸氏の作品をしのびつつ、各二首ずつを抄出する。

命保てるもの　大谷　吉次

・日盛りをあへぎあへぎて歩む犬命保てるものはかなしき

・暮るるまでに刈り終りたき畦の草はや露もちて袖口濡らす

古き家　太田　貞子

・二百年を堪へ来し家の隙間風寒き部屋にも慣れて老いゆく

・亡き夫の書きしカルテの保存期間すぎて無雑作に子の燃すと言ふ

戦没者追悼式　小倉　松子

・両陛下今し迎ふと式場に六千人の呼吸（いき）ころし待つ

・陰膳の冷えたる飯に足らひたり夫と二人で食ぶる思ひに

はぐれ雲　日下ふさゑ

・唐きびの葉のかさこそと鳴り出せば杳く逝きたる母よみがへる

・昨日踏みし雪の足跡今日もふむ郵便配りの谷橋の上

難民の子　野中　勝子

・枯木のやうな難民の子を写しゐると感慨こめし子の便りつく

・炎天の日傘の陰に納まりてわれの思ひの自在が愉し

土蔵の白壁　山田百合枝

・落書は読みとり難し弟のかな文字のこる土蔵の白壁

・我が膝に小さき命の重みのせ縫ひぐるみのごと眠れる小犬

朝の祈りに　山本　千代

・佛壇に籠りてゐたる菊の香が漂ひはじむ朝の祈りに

・去年ここに詣でて頼みし子の縁の叶ひて今日は嫁と連れだつ

みつまたの花　渡辺ちよの

・村長の父が参内せし皇紀二千六百年もはるけくなりぬ

・わが村のラヂウム鉱泉湧くあたり開発逃れし三椏の咲く

紙とエンピツがあれば、何時どこででも出来る短歌。日々の生活の中に、人生の節目に出合う喜怒哀楽を三十一文字に表現してみませんか。毎月第三日曜日午後一時より、防災センターに集まっています。

短歌祭入賞入選作品

◇第九回宍粟市市民短歌祭

（九月八日・宍粟防災センター）

。兵庫県知事賞

峡の村に嫁ぎきたりて十数年よめは訛りに馴じみて暮らす

岡本　光代

。兵庫県議会議長賞

さあ行くかと幾度も自分をはげまして仕事に出でゆく夫は古稀なり

長田　幸子

。神戸新聞社賞

花嫁のわが後姿（うしろで）を寂しげに見送る父をアルバムに知る

鉄矢婦美子

。宍粟市市長賞

耕運機の振動かすか残る手に乗せる湯呑みの茶もゆれており

志水　晴美

。宍粟市議会議長賞

葉づれする音さそひつつ水張田を渡り来る風顔あげて待つ

芦谷　孝子

。宍粟市教育委員会教育長賞

新緑に囲まれし寺に写経する耳に優しき鶯の声

宇野　澄子

。宍粟市文化協会会長賞

手のひらに包みて洗うミニトマト一つ転げてまた夏が来る

菅谷美津子

。宍粟市歌人連盟賞

五センチの胎児なれども存在をつわりという名で主張してくる

高尾　米子

ひと言も言い返さずに茶を飲めば湯のみの底に苦みのこれり

坂口　廣子

温かき手を重ねくる花嫁のネイルアートが冬日に光る

中村　玲子

ガラス戸に当りし川セミ温もりのいまだに残るをもろ手に囲う

殿垣　良枝

心開かぬ生徒なりしと師は大き双掌に吾が手包み給ひぬ

山崎　智絵

身動（みうごき）の出来ぬ私に　夫の手で　握ってくれたおにぎり二つ

栗山きよみ

けふ兄となりたる三歳　野球帽をまぶかに被りその覚悟見す

佐伯恵美子

言語障害の嫗の言葉　解せぬまま握手を交はしほほゑみ交はす

佐々木タエ子

寡黙なる夫とわれなりお茶をのむこの幸（さいわ）いをふたりのみ知る

田路　和子

野に還る棚田弔ふごとく降る裾野の桜一樹花雨

岡田　康子

◇西播磨短歌祭（平成二十五年）

（一般の部）

。兵庫県議会議長賞

父の日に娘の贈りくれし杖今日からこれを頼りにするか

安東　恒雄

。入　選

子の腕に導かれつつ席につく友のお通夜の人混みのなか

竹田　長司

亡き友の声が残りし留守電を一人の厨でくり返し聞く

渡辺　澄子

（学生の部）

。奨励賞

久しぶり雀の鉄砲吹いてみた子どもの頃より下手になってた

県立山崎高等学校　福井　光咲

山崎歌話会詠草

昼さがりを空を眺めて歩く人この世を少し忘れしやうに

安東はつ子

しぐれのち晴れて冬虹たつ見えてことなく過ぎぬわが誕生日

岡本　光代

腹這ひて膝まで辿りつきし児を抱きてどっこいしょと立ち上る

栗山　節子

サワサワと木枯し吹いて坂の道波の舞なり枯葉流るる

小林　早苗

家の門にくるくる廻る風車ありあつき空気を押し退けてゐる

城内　悦子

空っ風に柿の木の葉もみな落ちて中空高く赤き実ひとつ

森谷　康弘

絶ゆるなく線香薫る宝山寺額づくうなじに落つる一葉

森本千代子

林間をかよへる風のあるらしくところ移りて黄葉（もみぢば）の散る

森本萬千子

いく度を犬と歩みし小流れの小草ふみゆくひとつ吾が影

山崎　智絵

俳句

最上山公園もみじ山吟行

青嶺句会　渡辺　明美

短い秋も終り十二月二日、恒例の秋の吟行。今年は地元のもみじ山へ、祭り時のあの賑わいは何処へやら、それでも名残りの紅葉が迎えてくれた。八幡宮へも参拝する。神殿の前に和田疎人先生始め大先輩方の献句の扁額が掲げられていた。

・紅葉晴れ宮の献句の文字薄れ　緑　山
・神の杜友と和みて紅葉坂　ゆ　き

東の磴を下り弁財社へと、此処の紅葉も赤く燃えて美しい。人声に鯉が寄って来る。

・薄き陽を集め紅葉の映える池　良　子
・散り敷きて野面を染める濃紅葉　チエノ
・踏みしめる紅葉の絨毯錦なる　幸　子
・一山を染めて散り敷く冬紅葉　榮　子
・もみじ山吟行日和賜わりて　美保子
・舞ひながら名残りの紅葉地に還る　光　子
・貸し杖と友の肩借り紅葉狩　延　子

句会場は老舗の菊水にて、先ずは和やかに昼食を戴く、続いて選句、披講へとスムーズに進む。

・茶室へと小さき飛石草紅葉　駆　雲
・八十路なほ乙女に返る紅葉宿　とみ代
・尾根めぐる紅葉の絨毯句碑の径　明　美

残念ながら何時も句座を盛り上げて下さる方が欠席でした。吟行句ではないのですが十一月詠草の中より。

・着ぶくれて至福の極み手酌酒　茂　太

和気藹々として又少し緊張感のある楽しい時間はあっと言う間、次回の兼題を決めて穏やかな小春日和であった事に感謝し散会となる。

青嶺句会詠草

・法灯の揺らぐ本堂花は葉に　大谷　延子
・今年また菖蒲さす軒古りにけり　門積　緑山
・大和路の緑したたる柿若葉　茂田　茂太
・薫風に誘われめぐる城下町　杉山美保子
・会釈してまた振り返る春日傘　田中　良子
・新緑や覚え始めしかなの文字　鳥羽チエノ
・ランドセル背中に馴染み夏めける　永井とみ代
・菖蒲田へ短かき板橋踏み渡る　原田　駆雲
・ひそと咲くたたら遺跡の九輪草　三浦　ゆき
・新緑を天蓋にして地蔵尊　山口　榮子
・新緑の香り漂う大和路へ　若松　幸子
・紫の一際凛と花菖蒲　渡辺　明美
・百歳を寿ぐ一会風薫る　秋久　光子

さわらび句会詠草

・蓬摘むいつか手籠に溢れいて　小林　紫生
・若葉風ときおり鳥語かん高く　山岸その子
・足もとに小雀の来てカフェテラス　本條　淑子
・純白にひそむ藍色七変化　藤井　七代
・チゴイネルワイゼン　目をとじて聴く夜長かな　壺阪加代子
・月今宵小鳥の夢の蒼からむ　薄木満寿恵
・走り根や団栗拾ふ園児達　山中　正子
・冬暖か短かき便り目読す　川崎　栄子

五色しそう句会詠草

「五色の四季」

・元朝や小さく燃ゆる祠の灯　秋久　光子
・風二月農小屋の藁の乱れかな　福元　敦子
・梅越しの海光りゐる美(は)しき国　井口　泰子
・木の芽風行き渡りたる雑木山　冨井　幸子

・地滑りの棚田に蝌蚪の生まれけり　重田　陽子
・蛍飛ぶ風湧く村のせせらぎに　三浦　雪
・ふところに溢る潮風夏帽子　米子香珠子
・白壁に残る疵後終戦日　角野桂治郎
・高畝を均して野分通りゆく　重田　陽子
・烏瓜風にふわりと酔うており　秋久　光子
・踏む音に違いありけり落葉径　角野　慶子
・木の家の終の棲家の障子貼る　福元　敦子

山脈句会詠草

・冬耕や猿に見られてゐるやうな　浅田　蕪耕
・雲一つなき大空や鳥帰る　稲田　富子
・糊固き旅の枕に聞く時雨　宇野　幸子
・夫とゐるそれが幸せ春障子　栗山きよみ
・ひまわりや黄泉へ旅立つ友送る　田中　恵
・老いるとは抗(あらが)ふことか晩夏光　西田　宣子
・散策のどの道ゆくも風光る　福田　祥栄

白牡丹句会詠草

・菊日和薬師如来の御手かな　井口　洋子
・朝市女口巧者なる大晦日　重田　陽子
・広島忌長崎も響けレクイエム　清水　省三
・土佐路ゆく行の友より雪便り　田中　慶英
・逢魔が時千年藤の香り立つ　鳥羽チェノ
・問診のひとつに疑問枯れ木立　松本　壽子
・ふる里は星降る村や木の実落つ　三浦　ゆき
・あれも夢これも夢なり蝉しぐれ　福井　清翠

やまさき文化大学俳句部

・山茶花や夢追いし頃遠かりき　金山　英子
・顔見世や早一年が走り抜く　清水　省三
・一徹な捌き音して松手入　坂井　惠子
・流星やリンの音とどけ浄土へと　坂井　久栄
・かさこそと木の葉戯る風師走　竹内　幸子
・小春日や遊女の里の牡蠣筏　高井　智代
・日の出待つカメラの列や冬帽子　田中　慶英
・母の忌や搗き立ての餅佛前に　西嶋　忠義
・捨て置きしバケツの中に初氷　萩原　恵子
・緩みなき墨打つ棟梁息白し　速水美智代
・慣はしを子供にたくす年の暮　橋本　昭子
・官兵衛の大河ドラマや町は春　平形　照美
・頼らるることまだ多し年用意　宗平　圭司

山崎みやこ句会詠草

・山肌に白き色さす春の雪　東　田鶴子
・大根煮てどこにも行かず一と日暮る　是兼　妙子
・境内の焚火に集ふなじみ顔　坂井　惠子
・海峡の波に消え行く虎落笛　坂井　久栄
・初詣団体バスの客となる　竹野　脩子
・いつよりかここがふる里豆の飯　土井　洋美
・四方の山囲む十戸の初景色　速水美知代
・煩悩にふりまわされて大晦日　矢野登次郎

しそう笹ゆり句会詠草

・英霊の荒野の風や菊供ふ　小田　朝子
・数へ日やよぎる幾とせ恙なき　重田　陽子
・小春日や四匹のメダカ笑みこぼす　竹添寿美子
・凍て蝶の翅よみがへる掌　田中　慶英
・追焚きの落葉が匂ふ風呂恋し　谷口　昭子
・笹鳴きの少し間のあく行者径　宗平　圭司

随想

身辺記「苔庭らしく」

三宅哲朗

わが家の庭を〝苔庭らしく〟してみたいと思ったのは、たしか昨年の六月ごろではなかったかと思う。

私は足腰を鍛える意味で最上山公園によく登るが、その途中の道路わきのところどころにコケが付着して生育していることに気が付いていた。雨あがりのあとなどは、そのコケがみずみずしく鮮やかな緑色を一段と際立たせながら通りすがりの私の目を楽しませてくれる。しかもよく見ると、石垣やアスファルトの割れ目などにもコケはきっちりと生育範囲を広げており、その生命力の盛んなるさまに驚きすら覚える。

それであるとき、路肩のコケの一部を剥がして家に持ち帰って庭に移植してみた。わが家の庭といってもこじんまりした前栽であるが、飛び石の間にスナゴケが密生しているところもあり、それは緑のジュータンのようにふんわりとして見た目にもやさしく私の心をなごませてくれる。採取してきたコケを移植しながら、そうだ、この庭をもっと〝苔庭らしく〟してみたいと思った。

それで私は、まずコケの勉強から始めた。図書館からコケの本を数冊借り出して、コケの種類や、コケに適した土壌とか、水のやり方、コケの増える生殖のメカニズム、などなどを勉強した。またコケの解説書にはコケの名庭を紹介した記事もあり、やはり京都に苔庭で有名な寺院が多いこともわかった。よし、「百聞は一見にしかず」と言うではないか。そこで私はかの有名な京都の西芳寺、通称苔寺を見に行くことにした。

京都の夏は蒸し暑いので風が爽やかになる十月を待って、「京都・苔の名庭を鑑賞する旅」と自分で銘打って一泊二日の日程で京都へ出かけた。

案にたがわず苔寺はすばらしかった。広い寺院の庭園をびっしりと覆ったビロードゴケ（学名＝ホソバオキナゴケ）は他に類を見ないほどなめらかで、そのゆったりと波打つようなうねりは優艶でその質感は柔らかく且つ豊潤であった。そのうえこの苔庭は歴史の重みが違う。世界文化遺産なのである。

翌日は鹿ヶ谷の法然院、紫野にある大徳寺の塔頭龍源院、同じく高桐院などの苔庭を視て廻り、ヒノキゴケ、オオスギゴケの群落の見事さに感嘆した。

この京都行きで、もう一つ思いがけない驚きがあった。それはこの日の午後に山科まで足を伸ばし、小野小町で有名な随心院のオオスギゴケを見に行ったときのことである。

この寺院の美しく手入れされた庭園を巡っているとき、庭を蛇行する曲水の中にミズゴケの一群を発見したのである。そのミズゴケはさらさらと流れるせせらぎのような水中で、まるで生きものの如くひらひらと身をくねらせているではないか。苔とは本来「静」であると思っていたのに、こんな妖しい「動」があるのかと驚いた。というよりびっくりした。

今にして思えば、平安王朝の昔から貴族たちはこの清楚な流れに臨んで曲水の宴を催してきたのであろうが、このミズゴケ達はその雅の残影なのかもしれない。

それ以来、私のコケ探しの山歩きが始まった。蔦沢の林道沿いに緑の鮮やかなタマゴケの群落を見つけたときは嬉しかったし、与位の友人H君が自分の持ち山へ案内してくれて、思いがけないほどのホソバオキナゴケを収穫できたときは急に身上が豊かになった気分になった。山里を歩いているうちに、山の斜面が東向きで適当な陽差しがあること、そして朝方の湿気があればコケは必ずあることもわかってきた。そういうわけでわが家の庭も採取したコケで次第ににぎやかになってきた。

一日に数回は庭に降り立って、水をやったり雑草を抜いたり落葉を拾ったりしながらコケ達の様子を見ているが、間もなく本格的な春も来ることだし、さてどこまで〝苔庭らしく〟なってくれるものかとそれが待ち遠しくもあり楽しみでもある。

観桜

山崎植物同好会
井口武一

かれこれ三十五・六年前になりますが、祇園の夜桜を見に行ったことがあります。円山公園の枝垂れ桜が篝火に照らされた姿は幽玄そのものでした。それ以来、立春が過ぎると桜前線はどこまで北上したかと落ち着きません。

桜の名所はいたるところにあり、同好会では今まで一日旅行や一泊旅行として桜見を楽しんできました。篠山城跡や津山城跡へも貸切バスで出かけました。品種を調べるには、京都植物園、神崎の桜華園、上郡さくら公園などが分かりやすいです。

桜の古木、珍木も見て廻りました。近くでは佐用町漆野のオオイトザクラ、樽見の大桜（エドヒガン・養父市）など見応えがあります。桜はそれぞれに風格があり、歴史があります。また、それにまつわる民俗的な行事が行われるところもあり、桜守からその話を聞くのも楽しいものです。

山崎小学校の校門を入って直進し、南の土手の手前に数本の桜があります。「淡墨桜」と碑が立ててありますが、ある学年の卒業生のみなさん（もう九十歳を過ぎておられます）が、還暦の同窓会を催し、その記念樹として、岐阜県の根尾谷にある日本三大桜の一つ淡墨桜の苗木を当時四〇本購入され、あちこちに植えられたものの一つです。エドヒガンの一種で、ソメイヨシノよりずっと早く咲き、早春の木々の芽吹く先達として淡い色彩を放ちます。

この原木は、樹齢千五百年とも言われ、継体天皇が自分の代わりに植えられて都に上ったとの言い伝えがあるほど古く、大正四年の大雪や昭和三十四年の伊勢湾台風で太い枝が折れて枯死の状態でした。これを作家の宇野千代が残念に思い、あちこちに建白書を送り、資金を集めて、立派に甦生させたということです。これを宇野千代が著書『淡墨の桜』として発表しました。今日では、年間二〇万人もの人が訪れるそうです。

まだ訪れていませんが、日本三大桜に「山高神代桜(山梨県)」と「三春の滝桜」がありますが、後者は福島県にあり、あの大地震や大津波、さらに放射能などにもめげず、毎春、凛々しく咲き続けているそうです。一度見に行きたいものです。

新潮会の今後の方向について

新潮会
鎌田裕明

平成二十六年は甲午（きのえうま）の年です。午（うま）の**う**は上へ飛び跳ねるの**う**、午の**ま**は前へ前進するの**ま**、といわれています。

そんなことで、穏やかな陽ざしの一月三日、上へ向かおうと、連れ合いと篠の丸城跡へ登りました。頂上への途中ご家族と一緒の福元市長さんや、古い知己に出会いました。この道は、天正十二（一五八四）年ごろ黒田官兵衛が西日本攻略の構想を練った道でもありました。

今年は年頭から、腰痛を押して積極的に山に登り、いい出会いを楽しむことが出来ました。いい出会いと言えば、私は新潮会で本当にいい出会いをいただいています。

新潮会の方々は、人生の達人・成熟した大人という呼び方がふさわしい方々です。これらの方に共通した点は、第一に、ポケットにビー玉を持っておられ、少年の頃の好奇心、新しいものへの憧れを持ち続けておられることです。また、趣味のことになると顔が急に若々しく饒舌になる方が多いのです。

第二に矜持高く自己抑制がきかせられるということです。過去を肯定し、もう一度生きるとしたら「別の人生を」と考えない、そんなタイプの人です。最高に力を出し尽くして生きてきた人が持つ気迫と不動心を感じます。

第三にものにとらわれないということです。広い心を持ち豊かな経験から多様な考え方や見方をされるということです。

さて、会運営については瓶内正敏前会長からの引き継ぎを含めて、新潮会創立後六十二年の歴史を総括し、この間の社会の変化、会員の意識や体調の情況を踏まえて考えることが必要かと思います。

このことは、今日の政策論争で高福祉を低負担で実施するとか、高齢化対策と少子化対策及び老朽化したインフラの改修と交通網整備の同時施行といった「あれも、これも」をすることから、プライオリティを決めて「あれかこれか」と精選しようという提言に通底する問題とも考えられます。いずれにしても会員諸氏のお考えを適切に反映していくことが肝要と思っています。

囲碁「石心」

山崎囲碁同好会
岸脇和行

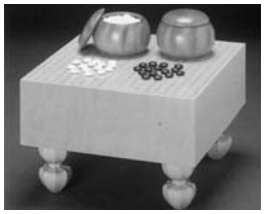
難読地名の西の横綱宍粟の地に、囲碁の歴史が四百年に及ぶと聞きます。囲碁誌宍粟の碁『月と星人と石』が、昭和五十八年に発刊されています。昭和の時代には、関西棋院の橋本宇太郎元本因坊や、NHK杯優勝者橋本昌二九段等有名なプロ棋士が、来訪。当地実力者達との指導碁の交流対局が行われています。その中に諸先輩方の対局譜が載っており、拝読すると大変興味深いものがあります。

私の囲碁との係わりは、四十数年前倉敷に勤めていた頃、同僚で三歳年輩の碁の愛好家がおりまして、時々相手をしていました。九州男子の彼は滅法腕が強く（私が弱い）、とても歯が立たない存在でした。それでもよく打ってくれました。会社に囲碁部があり、彼の紹介で入会し月例会にも時々顔を出すようになり、ある時偶然にも大会で優勝したことがありました。私は初心者の部なので当然置碁の対局。相手となる人がすべて鉄人のように思えた記憶があります。

昭和五十一年郷里宍粟に戻り姫路へ勤務しておりました。十年程前学遊館祭りに行った時、会場内で囲碁大会があることを知り、飛び入り参加をしました。それまで永い間対局をしたことがありませんでしたが、久しい囲碁の感触と喜びが蘇ってきました。平成二十二年末退職。一年余りは自分でやりたい事がありその翌々年二十四年二月に近くにある囲碁クラブ忘憂・守拙会に入会させて頂きました。囲碁は、人生を豊かに、味わいと幅を与えてくれます。深淵、幽玄、盤上のロマンとも称される囲碁を通して、人と人との係わりを持てることも大きな魅力です。人には人の道があり、碁には石の道があると言います。ここは死んでもこう打つべきところだとも、打ち下ろした石の顔が立つようなそんな碁が打てるようになりたい。これからも素晴しい諸先輩に揉まれながら、囲碁を楽しみ、励んでゆきたいと思っております。

余白

碁なりせば劫なと打ちて生くべきを　死ぬるばかりは手もなかりけり



皆様とともに茶華道を

宍粟茶華道協会
梶浦あさの

このたび、山崎茶華道協会より、宍粟茶華道協会と改称されることとなりました。

花は池坊、嵯峨御流、知香流、東雲御流、未生流、未生流庵家、未生流中山文甫会、文化学院、茶は裏千家、表千家、御所流、庸軒流とあり、会員約百八十名の方々の茶華道を愛好する人たちの組織によって運営されています。

私は役員会に出席させていただきだして、まだ年が浅く、伝統ある会に対して理解出来ていない事が多々ある中で、このたび寄稿の依頼を受けました。未熟ですが、少しだけ自分の感じていることを書きます。

年間行事も多々あります。お茶席は年間三回ほど、お花会は、年一回、秋の文化祭に各流派の先生方の大作が一同に展示されます。お茶席では、先生方のお話し合いのもとに、茶席が出来、季節によって設らえも変わり、今年度の流行語にもなりました、まさに「おもてなし」の心を一服の茶を差し上げることによって、一人でも多くの方に触れていただけることができればと思っております。

昔は娘さんは、花嫁修業の一つだと思われるほど皆さんお稽古をされました。今は若い方の入会が少なく、今一度、茶華道に触れてみませんか。私も親先生から、たくさん指導していただき、今日にいたっています。心なごませてくれる花、そして心を落ち着かせてくれる茶、これからも一生懸命お稽古に精進したいと思っています。

たいへんあとになりましたが、今年度初めて最上山のもみじ祭りで、平成会の方々の協力により、お茶席をもうけました。たくさんの方々に、お席にお入りいただいて、ありがとうございました。

このように宍粟市の行事に参加させていただき、皆さまとともに、茶華道協会がますます発展していくことを願っております。

川戸岩田神社 子供獅子舞の誕生

山崎郷土芸能保存会
川戸岩田神社獅子舞保存会
会長 中村秀幸

川戸岩田神社獅子保存会には、子供のみで舞わす獅子舞も保存している。

子供のみの獅子舞を行う事となったきっかけは、遡ること十二年前のことである。社会教育研究発表会を翌年にひかえた、開催校の戸原小学校より「発表会のアトラクションとして、子供たちにできる郷土芸能がないだろうか」との相談があった。

獅子保存会で子供達に獅子舞を教えることとなったが問題もあった。短期間で横笛での囃子を覚える事が出来るか、又、横笛がないこと、従来の獅子頭では子供が舞わせない事等である。

笛については子供が馴染んでいるリコーダーを使うこととし、保存会員で笛の担当者が、音を仮名で表している横笛の楽譜を音符に書き直した。

獅子頭は、菅野小学校から子供用のものを借りる事ができ、四年生以上の川戸地区の児童で練習を始めた。

初めて触る獅子頭の動かし方に苦労しながらも、全員が一生懸命練習に取組み、その年の戸原ふれあい祭りで披露を行ったところ、大好評であり、翌年の社会教育発表会でも大成功を収める事が出来た。

秋祭りやふれあい祭りに子供獅子を続けようという事となり、自治会で子供用の獅子頭二体を購入し現在に至っている。

当時四年生で獅子係を担当した子供が、獅子舞保存会のメンバーに加わり、獅子舞の継承を担ってくれている。

子供獅子舞が本来の獅子舞の後継者作りにも寄与している事を喜びに、今後も獅子舞・子供獅子舞を続けていくことを誓う次第である。

古代ロマンの地・宍禾

昭和会
清水省三

日本最初の風土記『播磨国風土記』には、大国主命（葦原志許乎命）の活躍が多く記されている。宍禾郡には十二例あって特に多く、揖保・讃容の郡でも各五例に過ぎない。志許乎は周辺にも勢力を伸ばし、手柄山西南部地域も伊和部と言われた程であった。（志許乎と伊和大神が混同または同一視されているため以下「大神」と表記する。）

大神の宍禾ゆかりの主な所を追ってみる。ここに対抗馬として新羅の王子天日槍命が途上してくる。天日槍は宇頭川（揖保川）河口に現れ、大神に向かって「あなたは国の首長である。私の泊まる所を与えてほしい」と要求するが、大神は上陸を許さず、天日槍は剣を持って海水を掻き回し海に宿った。大神は恐れ、粒丘まで退いて食事をした。その時飯粒が毀れ「粒丘（揖保）」となった。

二神は争いつつ揖保川を上り、大神あわてて褶（平帯）を落とした（平見の地）。志文川、伊沢川、菅野川の辺りを争いつつ、波加の村に天日槍先に到着、大神遅れて到り「はからずも先に到りしかも」と言った（波加）。

国土占有の争いの決着を決めるべく、黒土の志爾嵩（高峰山）に登り、各々黒葛を三条ずつ足に付けて投げた。天日槍のはすべて但馬の出石に落ち、天日槍は出石に移った。大神のは一条は但馬の気多に、一条は養父に、もう一条はこの地に落ち、大神槇の御杖をこの地に形見として立てた、御形という。御形神社には葦原志許乎命が祀られ、天日槍も配祀されている。

その後、染河内の能倉にて、大神の食料がぬれてカビが生え、酒になった。大神国土争いに協力した神々を招き慰労の饗宴をされた。庭音の村と言い、庭田神社があり、大神が祀られ、後に事代主命になっている。日本酒発祥の地とも言われている。

大神は国づくりを終え、伊和の村に来られて酒作りの後「於和、我が美岐に等らむ」と言って亡くなられた。その御神徳を慕い建てられたのが伊和神社であり、その壮大な森に囲まれ、九二九年の延喜式内社にも、特に社格の高い名神大社と記載されている。

他にも面白いのは、大神の妻許乃波奈佐久夜比賣命が美麗なので、宇留加と云う閏賀地名の由来があり（閏賀稲荷神社）。安志姫神社には、大神が安師比賣神に求婚したが拒絶されたので、大変怒って石をもって川の源を塞ぎ止めて、三形の方に流したので、安師川の水は少ないなど、神と云うより人間臭い物語もあり、なかなかロマンに充ちている。風土記の世界を是非一度覗いていただきたいものである。

コーラスに救われた私

山崎町合唱連盟
（山崎町民合唱）
中野剛志

コーラス歴五十年などといえばいかにもベテランのように聞こえるが、昭和三十八年に青年団コーラス部を結成して以来ハーモニーの魅力にはまり、気が付けば五十年、しかし今や私の人生にかけがえのない趣味になっている。

山崎町民合唱は発足後多分四十五年になると思うが当初からのメンバーは三人。その中の一人である。さて、妻を亡くして半年ほど後、まだ落ち込んでいる私に「合唱祭を控えてあなたが必要、ご主人を亡くしたあの人も来られている」という誘いがあり、久しぶりだったが練習日に正直しぶしぶ出かけた。皆さんに心優しく迎え入れられて嬉しかったが、まともに顔をあげられなかったことを覚えている。

さて、練習曲を歌い始めて急に体がふるえ涙が溢れた。その曲は「わたしはここにいる　そしてあなたがそこにいてくれる　なんという喜び　たとい永遠にあなたの唇にたどりつけなくても…」という詩で、瀬戸内寂聴作詞の「ある真夜中に」だった。

栗山先生の解説によると、この曲は女性を「花びら」男性を「雪」に例えて、それぞれの愛を歌った曲であるとのことだったが、亡き妻への思いが断ち切れていない私にはあまりにも切なすぎたが「そばで見守って下さっているのですという教え」と受け止め、癒しを感じながら心を込めて歌った。歌っている間は合唱に夢中になれ、帰ってからも心静かに仏壇に手を合わすことが出来たのだった。コーラスを趣味に持ったことの幸せをこれほど感じたのは初めてだった。それからは練習日に欠かさず参加している。

最近、若い女性の入会者が増えて嬉しいが、男性は全く増えずに年老いるばかりなのでまことに心細い。ハーモニーの心地よさに身を沈められることがコーラスの最大の魅力。新入会、いつでも温かく迎えます。どうか難しがらずにコーラスを一緒に楽しみませんか。

さつき民踊グループの活動について

さつき民踊グループ　安川英美子

月日が経つのは早いもので、私がさつき民踊グループに入会させてもらって十五年が経過しました。

踊りが好きと、よき仲間に恵まれてこそ続けられたと思っています。

さつき民踊グループの活動は春の芸能祭・秋のふれあい文化祭には会員（十名）一生懸命皆なが揃うよう稽古に取り組んでおります。

また依頼があれば誕生会・老人会各施設訪問等ボランティア活動をさせていただき、皆様に喜んでもらえた時の達成感は、大変嬉しいものです。

踊りボランティアが終って帰る時、「また訪問して下さいね、楽しみにしています」と言われた時は、うれしい気持ちになります。

時には会員相互の親睦も図り反省やらよかった点など話し合って更なる向上に努めております。

長い間続けてこれたのも、元気で踊りを通して皆な仲良く、楽しく、そして何よりよい先生（坂東寿賀幸師匠）に出会えて教えていただいているお蔭であると思っています。

これからも地域の皆様方に喜んでいただき、お役に立つ活動を楽しみながら続けてまいりたいと思いますので、さつき民踊グループにどうぞ、暖かいご声援をよろしくお願いいたします。

心はいつも青春で

山崎美術協会
寺本　三枝子

山崎美術協会の事務局の仕事にたずさわるようになって十年、近年会員の減少に憂慮しています。

諸先輩が、近隣市町のどこよりも早く、山崎町で公募展が開ける土台をつくられた山崎美術協会です。素晴しい力のある、伝統のある会です。

山崎美術協会では、毎年協会展（一般公募）、会員展等々を開いています。日本画、洋画、書、漆芸、陶芸、七宝の部があり、それぞれ身近な人達の作品展です。

人は誰も、人生で一度は大きな転機を迎えるときがあります。それは結婚であったり、出産であったり、親の死であったり、大病をしたり等々、予想もつかないドラマが待っています。その時、自分の人生を振り返り、これからの人生の有りようを考えるものです。

自分の可能性に挑戦してみよう。作品展がそんなきっかけになれば。人との出合いが一助に成り得るといいな。

私が絵を描こうと思うようになったのは、小学生の時、ひまわりの絵を誉められたこと。それから、得意科目になりました。長い間描かなかったが美術展はよく観に行きました。いつか描けるようになりたい。退職したら、早速、親の介護が待っていました。一向にすすみません。片手間のように描きました。今度はなかなか上達しない事の悩み、迷いがストレスに。時には、うまくいく時もあり、そんなこんなの繰り返しです。波があっても続けることが大事だと思っています。

年をとっても前向きに、心はいつも青春で、好きな絵を描いていきたいものです。

作品展では、先輩方の素晴しい作品と一緒に並べてもらえることの喜びを感じる次第です。

山崎美術協会が地域文化の向上に寄与し、会員相互の資質を高める場として、さらなる発展につながりますように!!

始めての日本舞踊

山崎日本舞踊の会（むらさき会）
森　清子

昨年、むらさき会会主の若柳吉紫俳先生のお取り計らいで新たに「むらさき会」を立ち上げていただきました。日本舞踊を舞うといいましても、まだまだ未熟な者ですが、日々精進したいと思っております。小学校三年生の子ども達に始めて日本舞踊を指導いたしましたが、指導というより共にお稽古すると言った方が早いかもしれませんでした。順番だけ踊れても駄目よ。踊りは品よく、笑顔よと、いつしか子ども達に中谷先生の口癖を真似していました。

今後とも日々精進して、日本の伝統である日本舞踊を少しでも子ども達に教えられたら幸いと思っています。春陽会の先生、さくら会の先生方、また他の社中の方々には足手まといとは思いますが、今後ともご指導の程よろしくお願いいたします。

（以下、子どもたちの感想文を掲載させていただきます。）

大きな舞台に立って踊って

小学校三年生　森　新菜（にいな）

わたしは森先生に踊りを教えてもらっています。だからわたしはがんばって練習をしています。わたしは、「ふじの花」をいろんな所で踊りました。わたしが楽しみにしていたのは、山崎文化会館で踊ることでした。

とうとう本番が来ました。リハーサルは見ている人が少なかったけど、本番になるととても人数が多かったので緊張しました。でもがんばって踊りました。お母さんが文化会館に行く前に「新菜、お母さんは、最後までいるから気にせんとがんばりな。」と言ってくれました。だからわたしはぜったいがんばろうと思いました。音楽がなると「はい」と言う声におされて舞台に出ました。わぁ大きいなと思いました。踊りが終わるとほめてもらいました。とても踊りは楽しかったよ。また、どこかでたくさん踊りたいです。この一年間でいろいろ踊れてよかったです。

大きな舞台で踊って

小学校三年生　村田　桃愛（ももあ）

わたしは、七月から新菜ちゃんと日本舞踊を習っています。始めのころは先生に教えてもらってもなかなか上手に踊れずたいへんだったけど、練習を何回もして踊れるようになりました。そして公民館や地域の祭りなど小さな舞台で踊ってきました。

先生に十一月三日文化会館で踊ろうといわれて、大丈夫かなと思っていました。当日初めて美容室できれいに頭をしてもらって、着物も着せてもらい、少しドキドキしていました。大きな舞台に出ると、たくさんの人がいてとても緊張したけれど最後までがんばって踊りました。終わるとたくさんの人に拍手をしてもらってうれしかったです。

これからも、日本舞踊をもっと上手に踊れるようになりたいです。また、大きな舞台で、いっぱいのお客さんに見てもらいたいです。

吟詠と共に

山崎詩舞道連盟
吟道摂楠流　宍粟吟詠会
山口　摂徹

鞭聲粛粛夜過河
暁見千兵擁大牙
遺恨十年磨一剣
流星光底逸長蛇
作者　頼山陽（代表作）

この詩を、私が始めて聞いたのは、小学生の学芸会の時でした。六年生の男子が剣舞を舞い、先生が吟じられていた。舞う姿と聞いたことのない節調に感動したことを記憶している。

あの時から二十年近く経ってからだと思うが、宍粟の地に詩吟ブームがやってきた。私は早速入会することにした。

始めての稽古では、先生が詩についての解説をしてくださり、その後発声練習と続き、熱心に指導していただいた。当時は、稽古に行くのが楽しくて、早く稽古の日が来ないかと待ち遠しかったことを覚えている。

不識庵機山を撃つの図に題す・・・鞭聲粛粛夜河を過る・・・・何回目かの練習で、小学生の時に聞いたこの吟に出合うこととなった。

それから四十年、よく長い間続けられたと今になってつくづく想う。無級の時から「考査」「コンクール」にと詩吟を何よりも優先して続けてきた。それには、諸先生に恵まれたことと、吟友からの教えと励ましがあったからこそ今があるのは勿論であるが、やはり、家族の理解があればこそと、改めて感謝している。

漢詩は難しく、さらに吟詠は発音、発声、アクセント、音階、詩情表現等どれを取り上げても奥が深く、満足のできるものはいまだ得られていない。型に当てはめた吟詠ばかりを追いかけてきたような気がしている。

摂楠流総本部では、審査部に入部しており、毎年二回の審査員研修会が行われている。第一回目は有資格者全員を対象にしており、第二回目はその年度審査員に登録された者の実技研修が行われる。私もその会場の設営や当日の準備などを行い、ともに研鑽に励んでいる。また、別に発表会を設けて、吟詠をこよなく愛する暖かい気持ちで吟詠発表し、聴く側も同じ気持ちで聴き、楽しい大会もある。

難しく考えないで、詩吟を始めてみませんか。芸能祭が春と秋にあります。ともに舞台に立ってお客様に聞いてもらいましょう。

「あなたに響け、この想い」

宍粟和太鼓アーツ倶楽部　和太鼓教室
中本　義信

和太鼓に出会ってもうすぐ三年。半世紀を過ぎた私。「なぜ今頃になって和太鼓を始めたの」と聞かれたら、小さい頃から太鼓の響きに興味があったと直に答えられます。ただそれだけ。しかし今になってあなたもやってみないかと声をかけて下さった方がおられました。この年になって新しいことへの挑戦は相当の心構えが必要でした。けれど太鼓の魅力は心を動かし、まずは文化会館に行って少しだけ扉を開けて練習風景を見ました。少しの隙間から太鼓の響きとみんなの真剣な笑顔が飛び込んできて、はっと気がついたら観覧席の後ろから眺めていました。ここからが和太鼓と私と皆さんとのつながりの始まりでした。

もうすぐ三年、いまだにバチが踊っている、私と太鼓をつなげるのは信頼関係で太鼓も一人の相手です。太鼓の気持ちを理解してあげられてこそ響いてくれるのです。それぞれ全ての太鼓に個性があり特徴があるため、力づくで叩いても応えてくれません。太鼓の皮の振動にあわせて一緒に響かせる事で、この響きこそが隣で練習している仲間に伝わり、それが曲となって、あなたに伝わるのです。

また、太鼓教室は接客作法の修行の場でもあり、挨拶から始まり心遣いを楽器に対してまた設備、会館に対して勿論先生と仲間に対して、私自身の人生の見直しの場として、思いをこめてバチを叩きます。最近バチも踊る事無く私を受け入れてくれることが時々感じられる様になりました。

この太鼓から私の思いが伝えられる様、バチを通じて太鼓からあなたへ心の響きが伝わりますようにと願います。響感、共に想いを響かせ、しあわせをみんなで感じましょう。

郷土史再発見とガイド活動について

山崎郷土研究会
大谷　司郎

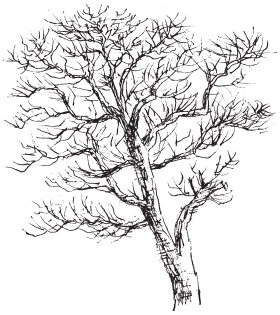
宍粟市では、本年度に「観光基本条例」が制定され、その実現に向けた基本計画も示されました。宍粟市に観光に来られる方は、年間一二〇万人といわれています。その多くは山の緑や季節のイベントなど、宍粟の自然の豊かさを求めて来られます。なかなか歴史の探求を目的に来訪される方は少ないようです。

今年はご存じの「軍師官兵衛」で姫路を中心として播磨全域が盛り上がっています。宍粟も秀吉から始めての知行地として貰ったことから「官兵衛飛躍の地」として盛り上がりが期待されるところです。

それにしても、こちらへ訪ねて来られた方にはガイド役が必要です。山崎の町内では五月の「ふじ祭り」、十一月の「もみじ祭り」に多くの来訪者があります。一昨年からこのイベントに合わせて、まち歩きガイドの取組を始めています。この活動は始まったばかりでまだまだ組織化されたものにはなっていません。まち歩きガイドに手を挙げていただいたのは、山崎文化大学歴史探訪部のガイドさんと、当会の会員合わせて約二〇名です。市の観光協会とも連携を取りながら、早いうちに組織を作っていこうとしています。

ちなみに市内では、ボランティアガイドの先駆として「しそう五〇名山ガイドクラブ」があります。宍粟の山に安全に登ってもらうためのガイド活動や登山道の整備をされています。

市民レベルで市内外の来訪者をガイドする、そんな機運を盛り上げていこうではありませんか。宍粟の北部には、宍粟鉄(千種鋼)の遺構が点在していますし、播磨の国一の宮「伊和神社」や古代の住居趾家原遺跡など歴史を訪ねる所は数多くあります。まず、それを知り、広めていこうではありませんか。



継続は力なり

山崎邦楽の会
石野　和雄

昔より継続は力なり、と言われてきました。目には特に目立たないようでも、一つのことに長い年月打ち込み、何十年も続けると、その成果は必ず出てきます。私達邦楽の会についても、会の名称はその時によって少し変りましたが、思い出せば終戦直後昭和二十年代には、会場も山崎町寺町にあった旭座劇場にて演奏会をしていました。それ以来は山崎小学校の講堂、下村記念館、今の文化会館へと移って現在に至っております。

最初はこんなに続くと思っていませんでしたが、今振り返ってみると、芸の道も熱心に努力する人はどんどん成長するし、やはりやっただけのことは効果が現れます。分っていても続けられないのが普通です。辛抱して続けた人には幸福が待っています。それともう一つ、晩年になって思うことは、人生その時々に出合った人によって自分の進む方向が決ってきたような気がします。人の一生は人との出合いによって辿る道が開けてくる。

あの時あの人と出合ったことで今の自分がある。それをくり返しながら何十年も通ってきたと思うと不思議な気がします。それがその人の運命だと思います。芸の道もその通りです。色々な先生や友人と出合いここまでやってきたのだとしみじみ思います。毎日を感謝して生きて自分の幸せを自覚することが大切です。

昔哲人デカルトだったかが言った「我思うゆえに我あり」で自分自身が幸せと思わなければ幸せとはいえません。

私事で恐縮ですが、尺八一すじにあの単純な楽器で一生やってきました。今に至っても満足な音色を出せず、これからの宿題です。音が出るだけでは感動は無く、やはり音色に人は感動するものだと分ってきました。食物に味があるように、音にも味があります。長くこの道を続けてきたお陰で、私の尺八道六十周年記念演奏会をすることが出来、一生の宝物となりました。これも皆さまのご支援と感謝しています。

「平成会二十五周年を迎えて」

平成会
三谷恭三

平成元年、今から二十五年前に私どもの平成会は誕生いたしました。この山崎を中心とした地域の文化の振興に少しでも寄与できればとの思いと、会員の研鑽・親睦を目的に、先輩である新潮会のジュニアを中心に約三十名の仲間が集いました。以来二十五年、平均年齢が三十歳台であった我々が、いまや六十歳を少し超える団体となっています。その間、ほぼ毎月一回例会を行い講師を招聘して勉強会を開いたり、時には酒を酌み交わして議論をし、親睦を深めてきました。

対外的にも、毎年ジャガイモ農園を地域の幼稚園や保育所の子供たちに提供したり、八幡神社の年末カウントダウンの無料年越しそば配布の奉仕等を行ってまいりました。特に五年おきに行う周年事業では、五周年が関西学院大学グリークラブ、十周年が〝一路〟の和太鼓、十五周年が新垣勉のライブ、二十周年は「高嶋ちさ子と十二人のヴァイオリニスト」といったぐあいに、特に音楽系の記念事業を開催し、地域の皆さんに上質な音楽文化を楽しんでいただいてきました。

今回は、西宮の兵庫県立芸術文化センター管弦楽団（通称ＰＡＣ）を招聘し、「春休み子どものためのオーケストラコンサート」を実施し、市内の幼小中の子どもたちを中心に地域の皆様に無料で楽しんでいただくことが出来ました。今後ともこのような事業を通じて、地域社会とつながりを深め、いささかでも地域に寄与できれば幸いに思います。

毎年その年の平成会会長は、その年度スローガンを提唱することになっておりますが、私は本年「室内一盞燈（しつないいっさんのとう）」を掲げさせていただきました。禅語の解説によれば、一つには油のともし火を絶やすことのないように、自分自身を常に光り輝かす努力を怠ることのないようにということと、いま一つは室内の燈火によって辺りを明るくするがごとくに、小さな光でも世の中を照らし輝かすことが出来る、つまり〝一隅を照らす〟とでも言うことかと思います。このように大それたことではなく、ささやかでも我々平成会の運動が、この地域でいささかでもお役に立てればとの思いです。どうか今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

記念コンサート

稀代の軍師「黒田官兵衛」

山崎民謡連合会
中川　摂昇

小生は、姫路市に在住する者ですが、二十数年前から宍粟市山崎町上寺の興国寺で民謡教室を開き教えています。一昨年、表題と同じ吟詠歌謡（詩吟入り）のCDをキング・レコードより吹込みました。今年のNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」が決まるより前にCDを出しておりますので、ここにご紹介させていただきます。姫路を中心に新潟・九州他で、歌っております。

さて、軍師官兵衛についてはたくさんの案内や資料が出ておりますが、ここでは自分なりのものをご紹介させて頂きます。

天文十五年（一五四六）御着城主小寺政職の家老、黒田職隆の嫡男として、姫路城で生まれた黒田官兵衛（幼名万吉）孝高は、稀代の軍師として羽柴秀吉の播磨平定や、中国攻め中国大返しを進言したりし、補佐しました。そして天下統一事業を支えたことで知られています。

その頃、播磨北西部（現在の宍粟市）の大部分を支配していたのは、長水城主の宇野祐清でした。宇野氏は龍野の赤松氏と並ぶ勢力を有していましたが、織田信長と敵対する毛利輝元の側に付いたため、天正八年（一五八〇）五月、羽柴秀吉軍の攻撃を受け滅亡しました。江戸時代中頃に書かれた『播州宍粟郡守令交代記』には、参戦した官兵衛が、陣中で「篝火に宇野（鵜の）くび見せる広瀬かな」と詠んだと書かれています。真偽は別として、もし軍師が詠んだとすれば、滅亡寸前に追い込まれた宇野氏を川から首を出した鵜に例えたところは、その軍略家としての自信が窺えます。宇野氏滅亡後、播磨平定の功を認められ、同年に秀吉から揖東郡など一万石を拝領し、官兵衛が初めて大名になり、山崎の城に入る、とありますが、詳しくは、分からないところです。しかし、確かなところでは、天正十二年（一五八四）七月に秀吉から「宍粟郡一職（宍粟郡全体の支配権）」を与えられており、このとき宍粟郡の領主となり正式な大名となったといえます。官兵衛が、初めて大名となったのがこの宍粟の地であることから、宍粟を飛躍の地として市ではPRされています。

長水城攻めの二年前の天正六年（一五七八）、摂津の国、有岡城主・荒木村重が信長に謀反、単身説得に赴いた官兵衛が幽閉されてしまいます。翌年に有岡城は落城し、家臣によって救出された官兵衛は、長い間土牢に閉じ込められたため、頭髪は抜け落ち、歩くことも出来ないほどの体になっていました。

その後、天正十五年（一五八七）、長年の功績が認められ、豊前十二万石の大名になり、九州に渡ります。

関ヶ原の戦いでは、黒田家は嫡男長政が家臣を率いて、家康側に付き、その間官兵衛は、九州の大半を押さえていきます。関ヶ原の合戦が早々に決着したことにより、九州を平定し、「あわよくば天下を」という夢はついえます。家康は、長政には論功行賞として、筑前五十二万石を与えました。

稀代の軍師として戦国の世を駆け抜けていった官兵衛は、ずば抜けた感と慧眼の持ち主であったと思われます。天下人となった人は、官兵衛をいつも恐れていて、そのために九州へやられたと推測できます。それでも最後まで天下をと、夢を抱き続けていたと思われます。

しかし、官兵衛は筑前五十二万石の礎を築き五十九歳でこの世を去りました。

最後にこのCDを所望して下さる方がありましたら、山崎町上寺興国寺（電話六二―〇九七五）までご連絡下さい。

第十八回 山崎八幡神社薪能

山崎謡曲同好会
三谷 恭三

山崎八幡神社薪能奉賛会が隔年に主催しています奉賛薪能を、本年も九月二十八日(土)に行うことが出来ました。

当日は穏やかな好天に恵まれ、午後の時間は、宍粟の謡曲愛好の人たちによる仕舞や謡曲が披露され、多くの拍手をいただきました。

午後五時からの薪能では、まず神事と舞台改めの後に、観世流上田貴弘師他による能楽「咸陽宮」が演じられました。続いて夕闇に包まれた境内のかがり火に火が入れられ大蔵流狂言「鬼瓦」が観客の笑いを誘っていました。

最後の番組「鞍馬天狗」は観世流杉浦豊彦師他で演じられましたが、この中では地元の小学生五名が出演するとあって、それぞれの家族や親戚を交えた観客で境内はたいそう盛り上がりました。

いつものことではありますが、この催しの開催が出来ますのも、市内外の多くの企業・個人の皆様の厚いご支援のおかげであり、心より感謝申し上げます。

公に頼ることなく、また宍粟の皆様に一流の伝統芸能を無料で提供しようとの先人の思いで重ねてきた十八回ではありますが、社会情勢の変化と共に、このような企画を続けることが大変厳しいのも現実です。出来る限りの知恵を絞りながら、開催を維持していきたいと思いますので、多くの皆様のご理解とご支援を心よりお願いいたします。

鞍馬天狗

咸陽宮

川柳破丸会

清水 省三

一年が早くも過ぎ、一月に百七十八回目の会合を迎えます。お互いにまた一歳年寄になったと笑いながら月一回集ってお互いの句を肴に賑かにやっております。これも長生きの秘訣かもしれません。どなたでも気楽に御参加下さい。

携帯に　頼り益々　筆無精
一度見たい　日本人の　土俵入り
減る年金　銭は足りぬが　暇余す
織金　和敬
クラス会　若さ自慢の　早生まれ
義理の仲　八十路きついお付き合い
気は走り　足は気程に　前に出ず
是金　芽吹
新年度　年金減って　税上げる
先生も　今は仲間の　老人会
病院で　待つ間互いに　予備診断
志水亀の子
鬼は外　俺はどちらに　おればいい
内緒やで　言われた話　ついぽろり
義理なので俺も義理ですホワイトディ
谷口　柳幸
走り出す　孫に口だけ　ついていく
患者見ず　パソコンを見て　診察し
スマートに使えぬスマホに四苦八苦
谷口　遊愉
此の頃は　なかなか散らない　姥桜
缶ビール　頼まれ買うのに歳聞かれ
洗濯物　干しつつ願う　夕立を
谷川そよ風
おっとっと　聞き手上手に喋らされ
おしゃれ好き今じゃ隠せるものでいい
議題より　噂話に　花が咲き
千本　風筈
散財を　存分したよ　百均で
内緒ごと　貴女だけよとみんな知り
衣食住　偽装偽装で　どれホンマ
千本　花夢
相続は「争続」と書き　意を得たり
初サンマ目と目は合った値が合わん
あーしんど　今日が一番　若いのに
坂東　笑雅
捜し物　捜しはじめて　小半日
だんまりを決めこむ浅蜊捨てられて
新社員　つかい走りが　初仕事
坂東　小舟
成人式　大人になれぬ　子が騒ぐ
おしゃべりの　友の話で　疲れ果て
追い越したトタン聞こえるパトの音
清水　三省

絵画との出会い

ターンアートクラブ
志水和司

ターンアート展には、油彩画で参加させていただいています。

私が、油絵を始めたのは二十歳の学生の頃。京都の四条河原町に気になって仕方ない店がありました。そこは、画材屋さんで間口二間ほどの狭いウインドに額やら石膏像が背中を見せていました。他の店は今時風に変化しながら世の流れに遅れまいと懸命に見えましたが、そこだけは、時代に流されず向かい風にムックと立つ哲学者のように孤高でまぶしく見えました。

数ヶ月後、その店に思い切って入って「油絵を始めたいのですが？」と切り出し、初老の店主であろう人が対応してくれ、道具一式を買いました。そこからです私と絵の深い関わりは。

さっそくその日の夜、迷いながらの制作が始まりました。小学生の時からの水彩画しか描いたことのない私には、少々大人で高尚な作業をしているように思え、油彩画を描く作業の向こうにダ・ヴィンチやレンブラントがつながっているようでどきどきしました。最初は、机上の筆記用具を描いたように思います。その次は、ラファエロの「サン・シストの聖母」を模写したり、雑誌のヌード写真を描いてみたりしました。キャンバスは、高かったのでキャンバス地のボードに描いていました。

絵を描くことは、子供の頃から好きだったのですが、田舎で育った私の周りには、文化的な臭いもなく絵描きで食べていきたいという夢など思いもつかないものでした。

何も知らないというのは恐ろしいもので、油彩画を初めて三ヶ月で「京展」に出品しました。当然落選しましたが、後日、入選している人の作品展を見てびっくり、どの絵を見ても欲しいと思うほど素晴らしく、出品したことがすごく恥ずかしかったのを覚えています。

あれから、三十五年あまり、途中仕事が忙しく、ところどころ絵を描かなかった時期もありましたが、どうにかこうにか続けてきました。

たいした作品も残していませんが、絵のつながりで知り合いも少しずつでき会話を交わせるようにもなり、そして、昨年、残りの人生、いい絵を描くことに専念したいなどという恐ろしい考えが頭をよぎり、仕事を早期退職しました。先輩や同僚からは「あほやなあ、絶対やめた方がええ！」と言われましたが、人生一度ぐらい一世一代の決断をしてもいいのではないかと思えもしました。

私は、ヤン・ファン・エイクやダ・ヴィンチの作品に魅せられ、小杉小次郎や有元利夫、生島浩の作品にあこがれ、近づきたいと思っています。

一度、生島さんと隣り合わせになることがあり、絵を教えて欲しい旨を伝えましたが、「志水さんは、今のままで進まれるのがいいんじゃないですか。」と体よく断られた感じでした。

一ヶ月ほど前から、絵画教室も開きました。「絵を描くことって楽しいだろ！絵って素敵ですごいだろ！」ということを笑顔で伝えていけたらと思っています。

最初に描いた画材屋さんにもった感動は、宍粟では、伊藤画廊の昔の店舗でも同様に感じ、三十五年の長きにわたり支えていただいたことに感謝しています。宍粟にもそういった若者に夢を抱かせる店舗や人が沢山現れることを望んでいます。

また、わがままに生きようとする私を許してくれている家族、気持ちよく手伝ってくれる二人のモデルさん・仲間に感謝しています。

第一回定期演奏会を終えて

宍粟市少年少女合唱団
育成会　堂田　由利子

私たち合唱団は、小学生十八人、中学生から大学生が十人の計二十八人の団員で昨年三月に発足したばかりです。以来、日々合唱やミュージカルの練習に取り組んでいます。本年一月に練習の成果を発揮すべく「第一回定期演奏会」を実施しました。以下、四人の小学生の感想文をお読みいただければ有難く存じます。今後も、宍粟の森に少年少女の歌声がともに響き合う合唱団を目指して力を合わせていきたいと思っています。

六年　衣笠　詩乃

最後のミュージカルは「ヘンゼルとグレーテル」。私はその中でも重要なヘンゼル役をしました。とても不安だったけど、とても楽しかったです。セリフかまないかな、間違えないかな、と心配していたけど、自分の中では良い演技と歌ができたと思いました。ジュニアの部で歌って、シニアの部にも参加して…と大変だったけど、逆にうれしかったです。卒団セレモニーでは本当に泣きそうだったけど、ぐっとこらえて最後まで歌いました。思い返してみると印象に残った時がいっぱいで、本当に成功したんだなと思いました。

ミュージカルができるのはこれが最後です。歌うことはできるけど演じることはないと思います。だからこそ、本気で取り組み、成功させてやるぞという気持ちでやりきることができました。とても楽しく、これからも力いっぱい歌っていこうという気持ちになれた定期演奏会でした。

六年　幸嶋　青季

合唱団は、定期演奏会に向けて夏からたくさん合唱やミュージカルの練習をしてきました。私はみんなと一緒に歌を歌うことがとても楽しく感じました。また、ミュージカルでは「ヘンゼルとグレーテル」をして、私はグレーテル役でしたが、とても役作りが難しかったです。でも私なりに一生懸命できました。

みんなで頑張って成功させた定期演奏会、今年は一回目でしたが、これからも長く続くといいなと思いました。私も中学生になっても続けたいです。

六年　堂田　裕

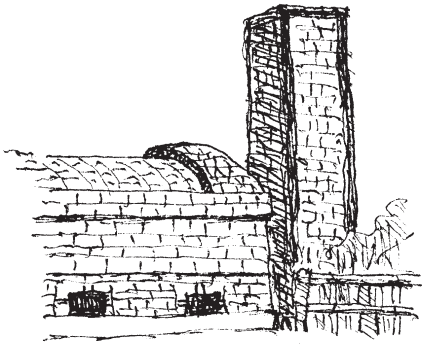
ぼくは、一年生から合唱団を始めていて、あっという間に六年が過ぎました。その中で心に残ったのは、今年の定期演奏会です。

ミュージカルでは森の精役で、セリフが長くて役全体に重みがありました。難しい役だったけど自信を持って演じきることができました。六年間、合唱団を続けてきて本当によかったと思いました。

六年　森谷　結衣

私にとってシニアの歌はあこがれです。シニアの歌はまとまりがあって、すごくきれいで、いつも「私もシニアの中で歌ってみたいな」と思っていました。だから、今回一緒に歌えることになり、本当に嬉しかったです。

本番で一緒に歌うと、周りからきれいな声がまとまって聞こえてきて、その中に私の声も入っているんだと思うと、すごく嬉しくなってとても楽しく歌えました。そして「やっぱり合唱って楽しいな」と心から思いました。私はシニアと歌って、これからも合唱を続けていくと心に決めました。



山崎いさわ冠句会

中瀬　公三　選

図書の棚　落葉の栞そっと閉ず　大谷　志路

図書の棚　知らない世界目を向ける　谷笹　まや

図書の棚　貸出し文庫孫連れて　為国真佐行

図書の棚　孫の寝息に読み聞かせ　内海喜代子

図書の棚　探し求めて紀伊国屋　宇田　千鶴

図書の棚　子等も静かに手をひかれ　実友　勉

図書の棚　時代を語りひもを解く　中務　淑子

図書の棚　見知らぬ世界目の前に　宇田　幸夫

今がある　躾厳しい親が居て　西川　少升

今がある　周りの支えあってこそ　嶋津　千里

今がある　幼木やっと実を付けて　山口　定子

今がある　やっと見つけた生きる糧　高井　玲依

今がある　昔の苦労倍返し　坂本　忠彦

今がある　人との出会い感謝して　三木ひづる

今がある　先人の汗しみじみと　大槻　浩美

今がある　山と川とに育まれ　中瀬　公三

平成二十五年度

イベント報告

山崎郷土研究会と合同研修旅行

昨年九月二十九日（日）に山崎郷土研究会が企画していた奈良方面への研修旅行が当文化協会との合同研修旅行として実施された。郷土研究会員や当会の理事たちを含めて四十五人の参加でバスの中は賑わった。

快晴に恵まれ、最初の訪問地、五條市の栄山寺に着いた。この寺は藤原武智麻呂により、養老三年（七一九）に創建された真言宗寺院で、本堂の厨子の中には薬師如来が祀られている。南北朝時代には、南朝の後村上・長慶・後亀山天皇の行在所がおかれていた。そのため「栄山寺行宮跡」として国の史跡に指定されている。寺域は広く、本堂から木立をくぐると鐘楼の中に、国宝の梵鐘がある。銘文から延喜十七年(九一七)の製作とされ、手で直に触ることができた。またその奥に国宝の八角堂がある。戦国時代末期に堂坊はほぼ焼失したが、八角堂だけは残った。

その後、明日香村に向かい、巨石が露出していて有名な石舞台古墳に向かった。観光客が多く、栄山寺の森閑とした雰囲気と対照的だった。明日香村特有の貸し自転車の利用者もあちこちで見かけた。

最後の見学地、県立万葉博物館に入館した。ガイドの説明に聞き入り、古代の文化の魅力を視覚に訴えて、分かりやすく紹介していただいた。

今回の研修旅行は古代のロマンを求めて、奈良県南部を訪れた。参加者全員和気あいあいと有意義なものとなった。

国宝、栄山寺八角堂

石舞台古墳

宍粟市山崎文化協会
役員及び団体名

会長　福岡　久藏
副会長　伊野　操治
　　井口　武一
　　清水　省三
　　前野　良造
理事　里見　亘　山崎郷土研究会
　　井口　武一　山崎植物同好会
　　町　悦子　山崎文学会
　　浅田　耕三　新潮会
　　森本萬千子　山崎歌人協会
　　竹添　和彦　山崎囲碁同好会
　　大西　耕雲　宍粟茶華道協会
　　三谷　恭三　山崎謡曲同好会
　　中村　秀幸　山崎町郷土芸能保存会
　　鶴崎　和宏　昭和会
　　堂田由利子　宍粟市少年少女合唱団
　　秋久　光子　山崎俳句協会
　　西川　慶子　さつき民踊グループ
　　福岡　久藏　山崎美術協会
　　石野　和雄　山崎邦楽の会
　　中谷　多江　山崎日本舞踊の会
　　西岡　行男　山崎詩舞道連盟
　　片山　澄之　山崎町合唱連盟
　　藤永　幸正　宍粟和太鼓アーツ倶楽部
　　田口　實　播磨さつき会
　　前野　良造　平成会
　　小野　晋　山崎民謡連合会
　　清水　省三　川柳破丸会
　　田中　涼子　ターンアートクラブ
　　宇田　幸夫　山崎いさわ冠句会
監事　安井　克典
　　大畑　芳一
事務局長　大谷　司郎
同次長　伊藤　次郎
会計　中澤ゆかり

（敬称略・順不同）

「やまさき文化」編集委員

編集長　清水　省三
委員　秋久　光子　浅田　耕三
　　荒木　俊介　鎌田　裕明
　　北川　泰子　前野　良造
　　町　悦子　森本萬千子

事務局だより

〝宝物ふたつ〟

本年度より山崎文化協会事務局の一員となりました伊藤です。よろしくお願いいたします。

私が、行政で芸術・文化を担当していました昭和五十七年二月に、本協会の前身であります山崎町文化連盟が機関誌として「やまさき文化」創刊号を発刊しました。その時に編集補助として携わったことを懐かしく思い出しています。

多くの方に尊敬されておられた初代の会長の庄静夫氏が巻頭言に「発刊を祝して」と題し「団体間の相互理解と協力関係を一層堅固にして・・・文字通りやまさき文化の花が美しく開花する日の来ることを心から念願し・・・」と書いておられました。このセンテンスから私が思い出しましたのは、あの当時、庄会長より「文化は人間が人間らしく生きるための糧となるものであり、文化は共に生きる社会の基盤の形成となるものであり、まさに文化の営みの継続と広がりはこの山崎のまちづくりの大きな力となる。」とご教示いただいたことです。私の宝物です。

もう一つの宝物は、この創刊号に山中陽一先生がお書きになった第一回の八幡神社薪能でのことでした。私は、能の音響の依頼を受け、機材を持っていきました。能楽の音取りは勿論初めてであり、マイクの配置は目立たない位置で、絶対にハウリング（音源がループしてピー！と鳴ること）は御法度、リハーサルは無し、しかも能面を付けた演者の音声がどれだけ取れるのか、アマチュアの甘えは許されず不安でいっぱいでした。本番前に私のミキサー席に羽織袴の老人が来られ、「あんじょう頼みますわな」と深く頭を下げられました。

午後から地元の方の謡曲がはじまり、夕方より、篝火が点火され挨拶、著名な茂山千五郎氏の狂言、舞台改、最後に土蜘蛛へと始まりを誘うような太鼓の音、小鼓のやわらかい音と大鼓の杜の中に突き刺さる高音の響き、合間を縫うような笛、そして篝火のゆったりした時間が流れる音、まさに幽幻の世界で時間を忘れて、能には素人ながら、なぜか感動したのを憶えています。演目の終了後、また、さきほどの老人が来られ「音響あんじょうしてもうてありがとう」と言われ、後でお名前を聞くと先代の江崎金次郎氏でありました。なぜ能楽界で高名な方が私のような若者（当時）に深々と頭を下げられたのか、しばらくして理解できたのですが、すばらしい文化人にお会いできたこと、そんな人間になるんやでと教えていただき「あんじょう」という言葉がお気に入りになりました。

当時の二つの宝物を今も大事に持ち続けています。

事務局次長　**伊藤次郎**

編集後記

『やまさき文化』も創刊以来三十三年目になりました。この永い間、諸先輩方の積み重ねられた歴史の重みをつくづく感じています。

今号では医学博士の稲澤譲治氏の貴重なご寄稿をいただき、郷土出身の方のご活躍を紹介することができ、たいへん誇りに思っています。

山崎文化協会には数多くの研究会や同好会があり、それぞれの文化団体の活動状況を誌上で拝見して、各々熱心に活動されているご様子がわかりたいへん嬉しく思います。

また、川戸岩田神社獅子舞保存会や宍粟市少年少女合唱団など、子ども達の活動の報告もあり、今後の成長が楽しみです。

これからも会員の皆さんの研鑽と活動の充実を期待するとともに、本誌がより味わい深いものになりますようお互いに頑張りましょう。

編集長　**清水省三**

ほっと、ひといき 伊沢の里

○お祝いの会食　　○法要後の会食
その他各種宴会承ります
リラクゼーションルーム　好評稼働中
〒671-2517　宍粟市山崎町生谷214番地１　TEL0790（63）1380

Specialty Camera Shop
コーエーカメラ

■本　店/〒671-2576
TEL(0790)62-2089　FAX(0790)62-7429
E-mail info@ko-e-1972.com

■咲ランド店/〒671-2545
兵庫県宍粟市山崎町中井10 咲ランドSC1F
TEL・FAX(0790)63-0533
E-mail saki@ko-e-1972.com

幸せへの旅立ちに――。
ふじむら貸衣裳
宍粟市山崎町山崎181　TEL(0790) 62-0052

デンソー指定サービスステーション
自動車電装品整備・携帯電話代理店
カメウチ電装株式会社
本社・工場　兵庫県宍粟市山崎町今宿 98－15
ＴＥＬ（0790）62－1607㈹
太子営業所・姫路営業所・神戸営業所・福崎店

宍粟の地域情報や活動を動画やコミュニティ情報で発信する地域SNSサイト

「E－宍粟」SNSムービー　http://shiso-sns.jp/tv/
「宍粟・播磨の城跡」コミュニティ　http://shiso-sns.jp/community/?bbs_id=122
「しそうの逸話」ムービーシアターコミュニティ　http://shiso-sns.jp/community/?bbs_id=96
「しそうの地名（由来）」コミュニティ　http://shiso-sns.jp/community/?bbs_id=102
「E－宍粟」デジタルサイネージ端末（高画質で動画を配信）：AEON山崎店、山崎文化会館など市内各所

しそうSNS
PowerdBy 宍粟市商工会＆しそう観光協会　http://shiso-sns.jp

地域で最も信用・信頼される
金融機関をめざして

●豊かな街づくりをお手伝いする●

西兵庫信用金庫

http://www.shinkin.co.jp/nisisin/
TEL 0790−62−2020

森の妖精/ネーチャ

森の妖精/サッキー

一献献上　品質本位

播州一献

まごころを伝えます。

TEL. 0790(62)1010
FAX. 0790(62)6218

確かな品質と味わい。

SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎 28

貴邸の電力を自給自足!

発電→売電
太陽光発電
Panasonic

×

発電+給湯
エネファーム
ENEOS

スマート&エコな
「光熱費=ゼロ」リフォーム

= お車と住まいの快適、なんなりと =

ホンジョウ

(株)本條商店・ホンジョウプロパン(株)
本社 宍粟市山崎町中井 96

石油・タイヤ・洗車・オイル
バッテリー・車両整備・保険
☎0790-62-4321

電気・ガス・水道工事・家電全般
住宅リフォーム・太陽光発電
☎0790-63-1234

創業明治28年・さつき本舗

四季の菓子

御菓子司 あふき

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を

山田店：播州山崎町山田 (電)0790−62−0160
福崎店：福崎町西田原 1177 (電)0790−22−7555

しーたん官兵衛
ボールペン・シャープペン

ノベルティー・記念品・粗品・景品に・・
今が旬のパイロット社製のボールペン・シャープペン

イトーオフィスサービス㈱
山崎町中広瀬117-12　TEL62-0126